

# Chiroptera

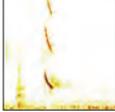
## コウモリ通信

Vol.17 No.1 2009. 12 (通巻第 22 号)



### C O N T E N T S

#### 各地からの報告

- 2  沖縄県伊平屋島で録音されたエコーロケーションコールはオヒキコウモリ類?  
吉野 元・Kyle N Armstrong
- 4  山梨県南アルプス市檜形山におけるコウモリ類の調査活動  
佐藤 顕義・勝田 節子・石原 誠・中川 雄三・吉倉 智子・山本 輝正
- 7  仙台市のマンションでヒナコウモリ(?)を発見  
杉元 明日子
- 8  チョウゲンボウによるコウモリの捕食行動の観察記録  
平田 寛重
- 8  横浜市西区で保護されたヒナコウモリについて  
板橋 正憲

#### 追悼文

- 10 コウモリ研究 46 年—森井 隆三さんの早すぎたご逝去を悼む—  
金子 之史
- 12 澤田 勇先生を偲ぶ  
原田 正史  
箕輪 一博

#### 海外レポート

- 16  韓国におけるコウモリ調査 (2008 年)  
山本 輝正・佐藤 顕義・三笠 暁子・野口 郊美

#### 国内レポート

- 24  コウモリフェスタ 2008 in 沖縄こどもの国  
吉岡 由恵
- 25  トカラ列島 エラブオオコウモリ紀行  
大沢 啓子・大沢 夕志

#### 事務局から

- 30 第 14 回コウモリの会総会報告
- 32 インフォメーション



# 沖縄県伊平屋島で録音されたエコーロケーションコールはオヒキコウモリ類？

吉野 元・Kyle N Armstrong



写真1 オヒキコウモリ類のねぐらがありそうな伊平屋島の籠屋洞窟の岩肌

オヒキコウモリ *Tadarida insignis* は、日本や中国、朝鮮半島、そして台湾に分布する(前田, 2008)。近年、日本各地から目撃情報が寄せられ、離れ島の岩や建築物の間隙でねぐらも発見され始めている (e.g. 金井 2000; 寺山 2000; 船越ら, 1999; 船越・山本, 2001)。

一方、スミイロオヒキコウモリ *Tadarida latouchei* は、鹿児島県奄美大島と口永良部島、そして与論島から各1頭の記録があるのみである (Yoshiyuki et al. 1989; Funakoshi and Kunisaki 2000; Yoshiyuki and Morita 2003)。いずれの種も環境省のレッドリストで情報不足 (DD) とされている (前田, 2008)。

今後、さらなる生態・分布の情報の蓄積が求められる。今回は、沖縄県でのオヒキコウモリ類に関する新情報を提供できそうなので報告する。

2004年12月16日夜に我々は、沖縄県伊平屋島でバットディテクターを用いたナイトセンサスを行った。その際に、田名地区の公園 (N27° 03'22.31", E127° 59'18.13") で、音圧の強い音が直接耳に聴こえた。ただちにバットディテクター (D980 ultrasonic detector; Pettersson Elektronik AB) を用いて録音し、BatSound Pro 3.31 で解析したところ、オヒキコウモリ類の音声構造に非常に類似したエコーロケーションコールであることがわかった (図1; 船越, 2005)。

約5分間の観察中、計17パルスを録音した。パルス構造は、FM(Frequency Modulated)型で周波数が短時間に変調しており、録音したうち3つのパルスは倍音を伴っていた。1倍音のパルス特性を計測した結果を表1に示す。初めの周波数 (Start Frequency) の平均値は14.88kHzで、終わりの周波数 (End Frequency) の平均値は9.97kHzと周波数帯域が非常に低かった (表1)。

このような低いエコーロケーションコールを発する小型コウモリはオヒキコウモリ類以外では知られ

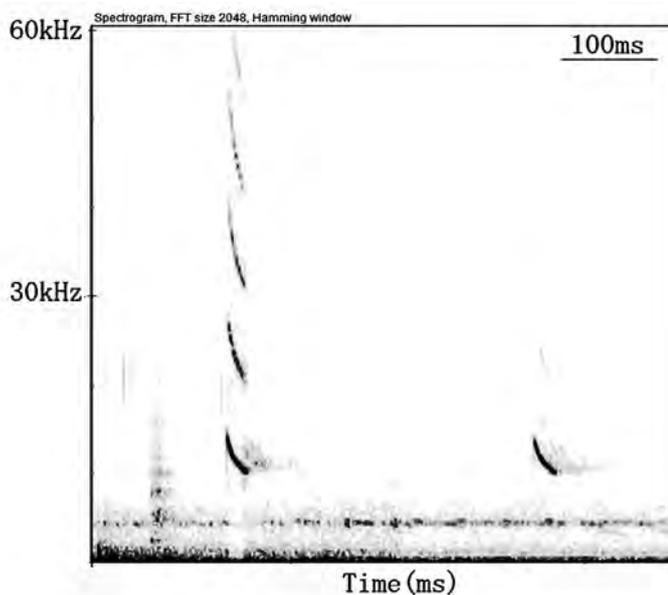


図1 伊平屋島で録音されたオヒキコウモリ類と思われるエコーロケーションコール

	End Frequency	Start Frequency	Peak Frequency	Duration(ms)
Mean±SD	9.97±0.15	14.88±0.10	10.77±0.28	23.97±2.05
Min-Max	9.7-10.2	13.6-17.1	10.3-11.3	20.1-27.8

表1 録音したエコーロケーションコールの1倍音のパルス特性 (サンプル数17), Frequencyの単位はkHz.

ていない(松村, 私信)。したがって、音の主はオヒキコウモリ類であることはほぼ間違いない。ただし、エコーロケーションコールによって、オヒキコウモリとスミイロオヒキコウモリとを判別する方法は確立されていないため、どちらの種であるかは不明である。あるいは、日本に生息していない大陸産のオヒキコウモリ類である可能性も否定はできない。

これまでに沖縄県でのオヒキコウモリ類の情報がなく、彼らは非常に長距離を飛翔すること(前田, 2008)から、今回の事例は「迷蝠」をたまたま確認できた可能性も高い。しかし、伊平屋島にはオヒキコウモリがねぐらとするような巨大な岩盤の割れ目が多く存在する(写真1)。そのため、今後この島でオヒキコウモリのねぐらを発見することができるかもしれない。伊平屋島でコウモリ調査を行う際は、そのような岩の割れ目なども意識して調査することが望まれる。

#### 引用文献

- 金井塚務. 2000. オヒキコウモリのコロニーが見つかった. コウモリ通信, 8(1): 14-15.
- 寺山美穂子. 2000. オヒキコウモリ観察記. 修道に生息するオヒキコウモリ集団に関して. 修道中・高等学校研究紀要, 17: 1-33.
- 船越公威. 2005. 九州産食虫性コウモリ類における超音波音声の解析と検索方法. 鹿児島国際大学情報処理センター研究年報, 10:1-14.
- Funakoshi, K. and T. Kunisaki. 2000. On the validity of *Tadarida latouchei*, with reference to morphological divergence among *T. atouchei*, *T. insignis* and *T. teniotis* (Chiroptera, Molossidae). *Mammal Study*, 25:115-123.
- 船越公威・前田史和・佐藤美穂子・小野宏治. 1999. 宮崎県に生息するオヒキコウモリ *Tadarida insignis* のねぐら場所, 個体数構成及び活動について. 哺乳類科学, 39:23-33.
- 船越公威・山本貴仁. 2001. 高知県蒲葦島からのオヒキコウモリ *Tadarida insignis* 生息地の新記録. 哺乳類科学, 41:87-92.
- 前田喜四雄. 2008. オヒキコウモリ科. (阿部永監修, 日本の哺乳類(改訂2版))pp62-63, 東海大学出版会, 東京.
- Yoshiyuki, M., S. Hattori and K. Tsuchiya. 1989. Taxonomic analysis of two rare bats from Amami Islands (Chiroptera, Molossidae and Rhinolophidae). *Memoirs of the National Science Museum, Tokyo* 22:215-225.
- Yoshiyuki, M. and C. Morita. 2003. The specific status of *Tadarida Latouchei* Thomas, 1920 from Yoron. *Animate*, 4: 33-37.

#### 謝辞

山口大学の松村澄子准教授、森林総合研究所の福井大博士には、エコーロケーションコールのパルス構造を確認していただいた。また、コウモリの会の山本輝正氏、三笠暁子氏には、原稿を読んでいただき、有意義な助言をいただいた。ここに御礼申し上げる。

(よしの・はじめ 東北大学生命科学研究科, カイル・アームストロング Australian Centre for Ancient DNA)

# 山梨県南アルプス市楡形山におけるコウモリ類の調査活動

佐藤 顕義・勝田 節子・石原 誠・中川 雄三・吉倉 智子・山本 輝正

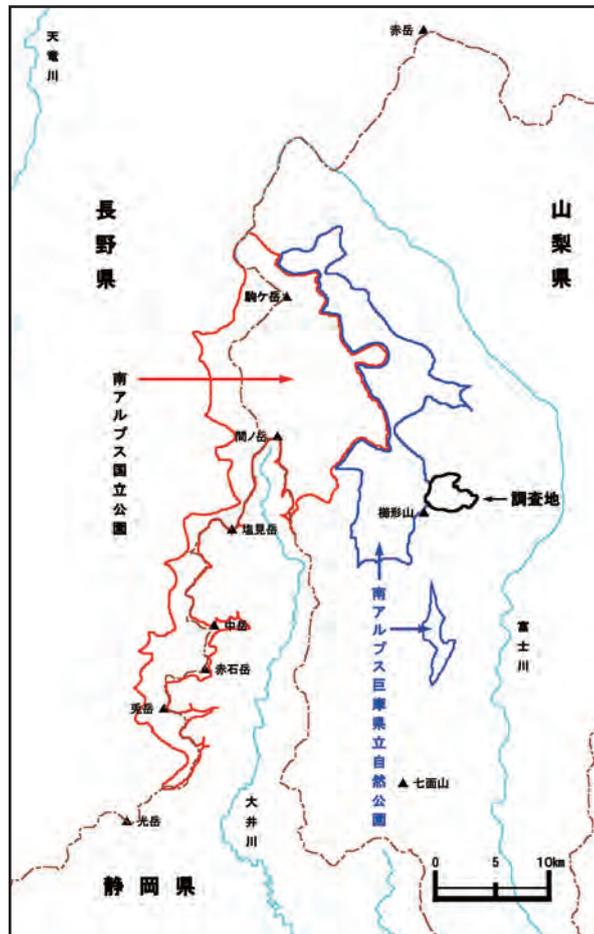


図1 調査地の位置



写真1 補修作業着手前のバットハウス(2007年11月24日撮影)。以前は堆肥場として利用されていた。壁面の板がはずれ、開放的である

## はじめに

筆者らは山梨県の「楡形山県民の森」やその周辺において、山梨県のレッドデータブック調査(山梨県森林環境部みどり自然課編,2005)や、ニホンウサギコウモリ出産・哺育コロニーの行動圏調査や個体数調査(吉倉ほか,2007;吉倉ほか,2009受理済み)などコウモリの調査や保護活動に係る研究を行っています(図1)。

これまでの調査で楡形山やその周辺において、キクガシラコウモリ科のキクガシラコウモリ(*Rhinolophus ferrumequinum*)、コキクガシラコウモリ(*R. cornutus*)、ヒナコウモリ科のクビワコウモリ(*Eptesicus japonensis*)、ヤマコウモリ(*Nyctalus aviator*)、アブラコウモリ(*Pipistrellus abramus*)、ニホンウサギコウモリ(*Plecotus sacrimontis*)、ヒナコウモリ(*Vespertilio sinensis*)、カグヤコウモリ(*Myotis frater*)、ヒメホオビゲコウモリ(*M. ikonnikovi*)、モモジロコウモリ(*M. macrodactylus*)、テングコウモリ(*Murina hilgendorfi*)、コテングコウモリ(*M. ussuriensis*)の2科12種を確認しています(山梨県森林環境部みどり自然課,2005;吉倉ほか,2007;石原,未発表;佐藤ほか,未発表)。

現在、生息種の把握とともに、コウモリのねぐらを創出する調査・研究を行っており、その活動状況の概要について報告します。

報告に当たって元堆肥場の利用について許可していただいた山梨県県有林課の森林利用担当の方々にはこの場を借りてお礼申し上げます。

## 活動内容

### 1) バットハウス(コウモリ用の小屋)

バットハウスは「くしがた山自然学校の森」内の標高約950mに放棄されていた元堆肥場を補修したものを利用しました(写真1)。

この元堆肥場は、基礎部分の土台にコンクリートが使用され、階段状に上段と下段の2段構造となっています。幅5.6m・前面高4.2m・後面高3.6m・奥行き11mの平屋構造で、梁部は鉄筋が使用され、天井内部・壁面は木材の板で築30年以上経過しているものと思われました。床面には古い堆肥や廃材が散乱して、前後の扉や壁板の一部も外れ、壁にはキツツキ類やムササビ等によって開けられた穴も多くありました。

改修は2007年12月7日に周囲の草刈り、床面の清掃、扉の設置を行い、周辺の元養豚・養鶏場、元休憩場と見られる小屋を解体した廃材を壁板や壁穴の補修材に用いて、コウモリが出入りしやすいように内側から隙間をもたせ、おもに上段部を遮光するようにふさぎました(写真3)。

2008年3月25日は上段部を内側から廃材やダンボールを用いてさらに遮光しました。そして4月12日には下段部も上段部と同様に遮光し、内部の梁や壁面にバットボックスを複数個設置しました。なお、改修前の清掃時にはコウモリの糞は見当たりませんでした。

改修後の2008年10月22・23日の日中の調査で、バットハウス内の上段部に設置した2ヶ所のバットボックスにそれぞれ1個体のニホンウサギコウモリを確認しました(写真2)。11月8日の調査ではウサギコウモリの確認はできませんでしたが、床面には糞が落ちていたことから、多少の期間バットハウス内のバットボックスを利用していたようです。

また、バットハウス内の床面にはマダラカマドウマの産卵管・ミヤマクワガタの上翅・カラスヨトウやウスヅマクチバの翅が散乱していたので、バットハウス内で採食していたと思われました。

以降、冬季にはバットハウスの利用が確認できませんでしたが、2009年4月19日に再びバットハウス内のバットボックス内で休息しているニホンウサギコウモリを1個体確認しました。しかし、5月20日には再びいなくなっており、現在のバットハウスの状況では春と秋の一時期にのみニホンウサギコウモリが利用しているようです。

## 2) バットボックス (コウモリ用巣箱)

バットボックスは、バットハウス内部に設置した他に、標高980m付近にある櫛形山森林科学館分室の外壁面の四方向にも設置しました(写真4)。分室の大きさは幅11m、高さ7.2m、奥行き11mのログハウス風の木造建築で、2000年に完成し築8年経過しています。ここに設置したバットボックスの大きさは、板厚9mmのコンパネ板を使用し、縦35cm、横150cmと170cmで内部に片側2cm、反対側が5cmと異なる中板を1枚使用して2つ間隔(スリット)を設けました。2005年8月に東面は約2.5m、西面は約4.3m、南面は約4.5m、北面は約4.6mの高さにそれぞれを設置しましたが、現在までにコウモリが利用した様子はありません。

## 3) バットサック (コウモリ用布袋)

バットサックとは麻袋をほどいた麻布を適度な大きさに切り取ったもので、紐は麻紐を使用し、下方が開いてコウモリの入出ししやすい形状となっています(図2)。形状は幹(Trunk)に巻きつける形状(T型)と、横枝(Branch)から吊るす形



写真2 バットハウス内のバットボックスにいたニホンウサギコウモリ(2008年10月22日)



写真3 補修作業着手後のバットハウス(2007年12月7日撮影)。廃材などで壁をふさいだ。その後、内部にバットボックスも取り付け。改修前の掃除ではコウモリのフンは見当たらなかった



写真4 森林科学館分室(矢印先端部にバットボックスが取り付けられている)

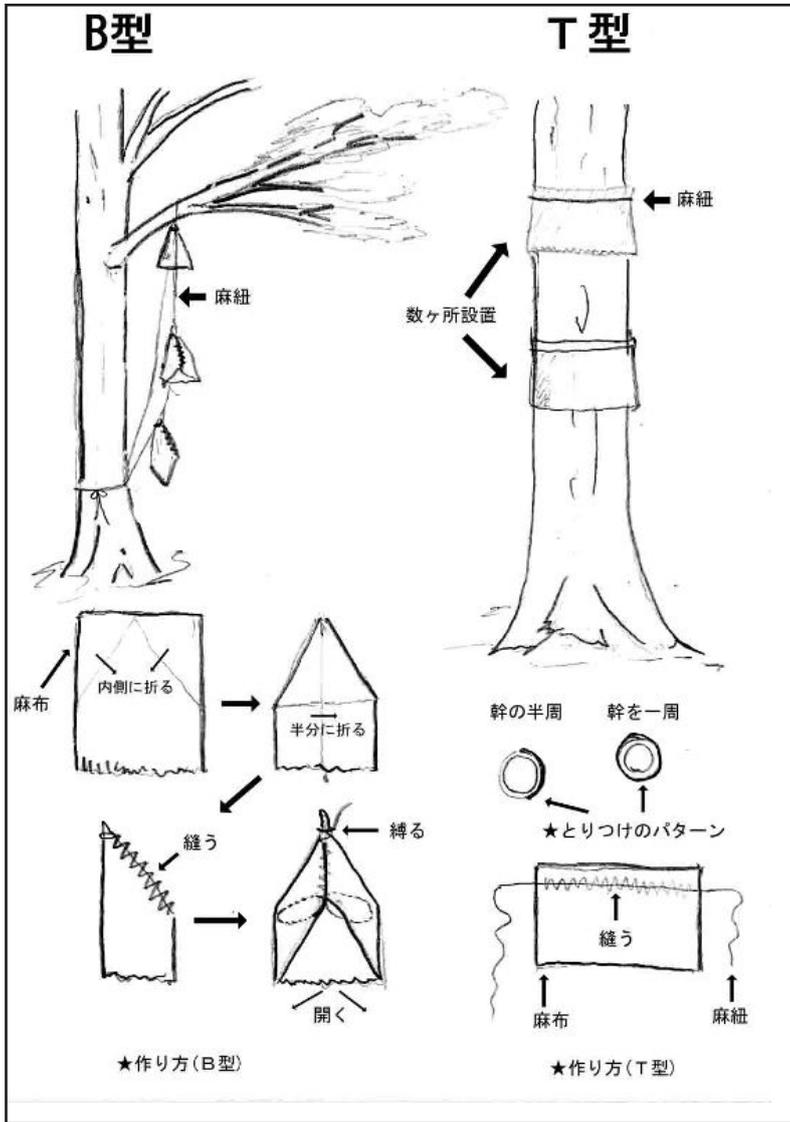


図2 バットサックの種類と作成・設置方法



写真5 バットサックT型を利用しているヤマネ

状(B型)の2種類を作成しました。T型は、剥がれかけた樹皮を模倣して、一本の木の幹に高さを変えて複数設置し、B型は落ち葉または葉の茂った場所を模倣して、一本の麻紐に複数個を取り付けて、高さ5～6m程度の横枝から下方に垂れるように設置しました。なお、バットサックは、自然由来の布材料で作成するため、落下・分解しても環境に与える影響はほとんどないと考えられます。2007年10月1日から調査を始めました。コウモリの利用は確認していませんが、ヤマネがねぐらとして長期間利用していました(写真5)。

#### 4) 今後の課題

櫛形山で確認されているウサギコウモリの出産哺育コロニーは人為的影響を受けやすい場所にあることから、本調査で使用しているバットハウスに新たな出産哺育コロニーが形成されることは、保護を行う上で重要なことと考えられます。従って、バットハウスやバットボックスの補修・改良を試み、さらに、餌動物が発生しやすい周辺環境の調査・整備を行い、定着性を高めてゆくことが必要であると考えられます。また、バットハウスが「県民の森」という公共地内にあり、さらにその場所が「くしがた山自然学校の森」であることから、コウモリの観察を通じた自然環境保全の啓蒙・教育の場としても活用されることがコウモリ類保護には大切であると考えています。

#### 引用文献

山梨県森林環境部みどり自然課(編). 2005. 2005山梨県レッドデータブックー山梨県の絶滅のおそれのある野生生物ー. 山梨県森林環境部みどり自然課, 甲府, 243pp.

吉倉智子・石原 誠・中川雄三. 2007. 山梨県櫛形山におけるニホンウサギコウモリの夜間行動と利用環境. 日本哺乳類学会 2007 年度大会プログラム・講演要旨集. 151pp.

吉倉智子・村田浩一・三宅 隆・石原 誠・中川雄三・上条隆志. 2009 受理済み. ニホンウサギコウモリの出産保育コロニーの構造と繁殖特性. (2009年6月9日, 哺乳類科学, 受理済み.)

(さとう・あきよし, かつた・せつこ 有限会社アルマス/いしはら・まこと 山梨県立県民の森森林科学館/なかがわ・ゆうぞう 山梨県富士吉田市/よしくら・さとこ 筑波大学大学院生命環境科学研究科/やまもと・てるまさ 岐阜県立土岐紅陵高等学校)

# 仙台市のマンションでヒナコウモリ（？）を発見

杉元 明日子

我が家は宮城県仙台市北東部、築2年13階建てマンションの8階部分にあります。JRの駅も近い住宅地ですが、周辺に県民の森に指定されている森林や、河畔林が残された川などもあり、自然は多い環境です。夏の夕方には、マンション横の空き地の上を小さなコウモリが飛び交う姿をよく見かけます。

2008年12月10日午前7時半頃、玄関先にてヒナコウモリと思われるコウモリを発見しました。各戸北側に専有スペースの門付き玄関ポーチがあり、片隅にちりとりと箒を立てかけてあるのですが（写真1,2）、この日久しぶりに（少なくとも1ヶ月程は触ってなかったと思います）ちりとりをどけたら、その下に1頭のコウモリがうつぶせの状態になっていました。



写真2 ちりとりの下にコウモリが…

指先でつついても動かなかったので、死んでいると思い、つまみあげたら少し動きました。ちりとりの上に乗せて室内に入れ写真を撮っていたところ（写真3）、小さな目を開きましたが、

すぐ閉じてしまいます。写真を撮りやすいように向きを変えようと体を触ると、口を開けてチャツツというような声を上げました。我が家で冬眠させようと思い、ちりとりの中に入れて寝かせ、箒を軽くかぶせて元の場所に戻しました。

翌日以降、毎朝そっとコウモリの寝ている姿を見るのが楽しみでしたが、翌週前半に気温が高い日が続いたせいか、17日には、ちりとりから出て少し離れた玄関の床で寝ていました。踏んでしまっただけで大変と再度ちりとりの中に戻しましたが、翌朝に見たときには姿が消えてしまっていました。通路に設置してあるエアコン室外機の下など周囲を探してみましたが、見つかりません。夜のうちに飛立ってしまったのでしょうか。それ以降また寒くなりましたので、どうしているのか心配しています。

住宅地に生息するのはアブラコウモリであるという先入観があったため、このコウモリも当初アブラコウモリとと思っていましたが、インターネットのブログに写真を載せたところ、友人がヒナコウモリではないかと教えてくれました。言われてみれば体長は7~8cm位あったように思うのですが、実際に計測はしておらず、今となっては正確なところはわかりません。もしまた我が家に来てくれることがあったら、もっとよく観察してみようと思います。

（すぎもと・あすこ 宮城県仙台市）



写真1 ヒナコウモリがうづくまっていた玄関ポーチ



写真3 ちりとりが気に入ったのかな？でも、発見から8日目に、どこかへ行ってしまった

# チョウゲンボウによるコウモリの補食行動の観察記録

平田 寛重



2007年のことですが、コウモリ（たぶんアブラコウモリでしょう）がチョウゲンボウに補食されたシーンを撮影しました。

場所は、神奈川県藤沢市立石、撮影年月日は2007年4月1日、撮影時刻は10時24分です。

橋桁の鉄パイプの中の巣にいたメスのチョウゲンボウが、コウモリをくわえてできました。その後100mくらい離れた橋桁の上に移動して食べていました。

ここからは推測です。時期的にオスがどこかからコウモリを捕らえて巣に運んできて、求愛給餌をしてメスに渡したものと考えられます。オスが運んできたと考えられるコウモリは、ど

こかに貯食されていたものなのか、ねぐらにいたコウモリを襲ったのか、昼間に飛んでいたコウモリを捕らえたのかのいずれかと考えられます。

現場周辺は川沿いの農耕地で、民家もちらほらとあり、少し離れて住宅地となっています。

(ひらた・ひろしげ 神奈川県伊勢原市)

写真 コウモリをくわえた  
チョウゲンボウのメス



# 横浜市西区で保護されたヒナコウモリについて

板橋 正憲

## はじめに

私の勤務する横浜市立野毛山動物園では野生傷病鳥獣の保護を事業のひとつとして行なっているが、2008年1月25日に市内西区平沼町で保護されたヒナコウモリのオスを受け入れ、これを同年4月に放野したので報告する。

## 保護および放野場所

この個体を保護した場所は帷子川と石崎川とに挟まれた中洲で、京浜急行線と国道13号線の二つの高架およびJR東海道線・相模鉄道線とに囲まれている、マンションの隙間に古い住宅が建て込んだ、いわゆる下町地域である。コウモリは、この町にある11階建てマンションの6



写真1 保護されてミールワームを食べるヒナコウモリ

階部分の共用通路でうずくまっているところを住民に保護され、本園に持ち込まれた。保護当時の体重は 13.6g、頭胴長は 6.8cm、前腕長は 4.9cm だった。

### 飼育経過

当初は手製のコウモリ用ケージに入れて屋内（室温 20℃前後）で飼育していた。餌はミールワームを用いた。床に置いた餌を自力で食べる事はなかったため、1日1回、ミールワームを指でつまんで挿してやった。

その後、コウモリの体力の消耗を考慮して、10日めからはプラスチック・ケージ（幅 26cm ×奥行き 16cm ×高さ 17cm）の中に止まり木となる板片を入れて、この中にコウモリを収容したまま冷蔵庫（-1～1℃）に入れて人工的に冬眠させた。冬眠中は2週間毎に室温で覚醒させて給水と挿し餌をした。

3月になって人工冬眠から解放し、4月3日、夜になってから保護場所の近くに持って行き、放野した。コウモリは「キキッ」と一声鳴くと、サーッと飛んで暗い街角に消えて行った。放野時の体重は 21.1g だった。



写真 2 保護場所付近の様子



写真 3 冷蔵庫内での人工冬眠の様子

### 結果と考察

- 1) 本園では 1971 年から傷病鳥獣保護事業を行なっているが、横浜市内でヒナコウモリが保護されたのは今回が初めてである。
- 2) ヒナコウモリの飼育下での越冬は、アブラコウモリで用いた手法で可能である。（内田,1985；板橋ほか,2007）
- 3) 保護場所にヒナコウモリが定住しているか否かは未確認である。

### 謝辞

私の公休中にコウモリの世話を代行して下さった小野香織・東野晃典・恩田英二・小林順子の 4 獣医師にはお礼を申し上げます。

### 引用文献

- 阿部 永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明, 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会, 東京, 195 pp.
- 内田照章, 1985. こうもりの不思議. 球磨村森林組合, 熊本, 146pp.
- 高桑正敏・勝山輝男・木場英久, 2006. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原, 442pp.
- 板橋正憲・須永絵美・東野晃典・小林順子・田坂樹里, 2007. 座間市内で保護されたヒナコウモリについて. 神奈川県自然誌資料 (28):51-53Mar.2007

（いたばし・まさのり 横浜市立野毛山動物園）

# コウモリ研究 46 年—森井隆三さんの早すぎたご逝去を悼む—

金子 之史



森井 隆三先生

コウモリ研究一筋を貫いた森井 隆三さんが昨年お亡くなりになって、はや6カ月が来ようとしている。森井隆三さんは2008年8月3日に65才という若さで、冥界に旅立たれてしまった。ご自身の身体が膵臓癌にかかされていることを知ったのは、2007年の夏であったという。

2008年の春に、私は森井さん自身の口からこの事実を知らされた。森井さんは「金子先生にだけはお話しするので、このことは絶対に口外しないで下さい」といわれた。そのとき森井さんは死を覚悟され、抗ガン剤や手術後に併発された糖尿病によるたえまないインシュリン投与という、苦しい病との戦いを続けられていた最中であった。何かの会合で、森井さんが最後のお別れを意識しながら色々な方々とお会いになっていた姿を拝見していて、壮絶な生き様を見せられた。

森井さんと私はコウモリをめぐってかれこれ37年の年月を重ねた。私が森井さんと出会ったのは1972年の5月の「香川生物学会」の例会のときである。私が京都大学理学研究科博士課程を修了し、香川大学教育学部に赴任した1カ月後であった。この例会は、香川生物の会員へ私の顔見せという趣向であり、例会終了後に生物学教室の植松辰美先生から森井さん

を紹介された。

私が大学院でおこなっていた研究は哺乳類といってもネズミ類だけであった。コウモリというのは未知の対象であり、はじめはとまどった。けれども、コウモリを研究していた同学年の前田喜四雄君（現：奈良教育大）と森井さんとは採集を通じて面識があったことを知り、森井さんとコウモリ談義がしだいに盛り上がった。

森井さんは当時香川県公立学校の教諭をされていた。香川大学学芸学部（現在の教育学部）に在籍中に屋島の洞窟でコウモリと出会い（1963年）、その後卒論にコウモリを対象にした内分泌腺の組織学的研究をされた。大学を卒業されても、高校生と一緒に屋島洞窟を訪れ、生物クラブの研究テーマとして研究を続けられた。私の手元にはいまでも立派に印刷されたその当時の生物クラブの報告書が残っている。また、それまでに、「哺乳動物学雑誌」に採集報告などをいくつか載せられていた。

森井さんは採集報告だけではなく、なんとか自分のコウモリ研究を続けたいと願われていた。1970年、当時はまだ海外の学術研究などというのはゴリラやチンパンジーなどを除いてほとんどなかった時代、香川大学学芸学部の卒業生を中心として台湾・沖縄の動植物調査がされた。沖縄はまだ米国による委任統治の時代である。森井さんはその時のコウモリ採集をなんとかまとめてみたいと願っていた。2回目にお会いした時には、このときの採集報告の原稿を持ってこられた。これが、私が見せて頂いた最初のコウモリ論文の原稿である（森井隆三、1975：台湾・沖縄における翼手類の採集。哺乳動物学雑誌6：121-126）。私も採集報告をどのように仕上げたらよいのか皆目わからなかった時である。

つぎの課題は、森井さんがコウモリ研究のライフワークをどのようにして確立するかであった。しかし、私にとっては、コウモリは具体的にどんな動物なのか、また、どのように研究を進める可能性があるのかは未知であった。私も学位論文を書き終え、これから四国でどのようにネズミ研究を続けられるか悩んでいた時期である。私自身学位論文を書く過程で、徳田御稔先生に「ハタネズミの生物学」というテーマを頂き、ある特定の種を対象として研究をすすめるのが一番実り多いと考えていた。そこで森井さんと何回かの話し合いの結果、「アブラコウモリの生物学」がいいのではないかということになった。

それまで、森井さんは洞穴棲のコウモリを手がけていた。しかし、もっと身近で研究しやすい対象としてアブラコウモリを選ばれた。今になって考えるとこの選択は適切であったといえる。というのは、それまでアブラコウモリの研究は、断片的には幾人かが研究をされていたが、なんといっても九州大学の内田照章教授が第一人者であった。しかし、内田先生が研究されていたので、内田先生の門下生である九州大学農学部動物学教室の若い大学院生さんたちもちょっと敬遠気味であったように思う。したがって、ある意味で言えば穴場であった。また、香川県では比較的容易にアブラコウモリを採集できた。とくに、民家の軒先などにフンをするので害獣駆除として相談を受けることも多く、生息の情報もいろいろと手に入れることができた。

森井さんは、この後、アブラコウモリを自分の研究対象と定め、多くの論文として纏めていった。その間の事情は、ご自身で書かれた『コウモリとともに』（森井隆三自費出版、2005）に詳しく書かれている。アブラコウモリで論文になった内容は、胎児・新産児の数、胎児・新産児の外部形態に関する成長、新生児の歯の交換、出巢開始時刻の季節変化、内部寄生虫である吸虫の季節的变化、水平分布、外部形態の絶対成長、体重の季節的变化、出巢個体数、性比・年齢構成の季節的变化などである。これらがアブラコウモリの生物学的研究の1つ1つとして産み出され積み重なっていった。

アブラコウモリが身近なコウモリであることを知って、私も少し変わった。大学構内で壁にしがみついていた死んでいたコウモリにも目を向けだしたのも森井さんからアブラコウモリを教えて頂いたからである。これらの標本はちゃんと年月日を記しておく、合計117個体も集まり、月別、雌雄別、あるいは年齢別のちがいもわかり、森井隆三(1997) 香川県産アブラコウモリの死亡個体の採捕、香川生物、24:23-30、として発表された。森井さんの研究とのお付き合いは、森井さんのお話を伺いながら私ができるアドバイスをするという仕方であった。

森井さんは何年間か根気強くデータを蓄える。すると、夏休みや冬休み中にデータを解析し、それをまとめるという形で規則正しくこまめに論文に仕上げてゆかれた。高等学校の教諭という本業をもちながら、このように着実にデータを取り論文にしていくという森井さんの歩む姿は、大学に勤め恵まれた状況にある私も見習わなくてはならないお手本であった。

私の卒論生で何人かの学生がコウモリを研究したいとやってきた。森井さんは快くご自身の研究時間を割いてコウモリ研究の手ほどきをして下さった。ある場合、学生は長年にわたって森井さんが収集した標本を調べることができた。また、学生が卒論を単著で「香川生物」などの雑誌に投稿することも許可されたし、まだ出版していない卒論を学生の名前を付けて未発表として扱って下さった。きっと、森井さんは卒業したこの学生たちが、いずれ森井さんの衣鉢をついでくれることを願っていたように思う。

森井さんの戒名「説誠院積隆蝠」には森井さんの隆三の「隆」と蝙蝠(コウモリ)の「蝠」の字が含まれている。中国では蝙蝠は五福をもたらす吉祥の徴だというから(森井『コウモリとともに』:113頁)、これはきっと森井さん自身も望まれた名前であろう。森井さんは冥土でも『コウモリとともに』いるのであると思う。心から森井さんのご冥福をお祈りする。

(2009年2月23日記)

(かねこ・ゆきぶみ 香川大学名誉教授)



香川県満濃町の洞窟調査にて



1999年、屋久島調査にて

# 澤田 勇先生を偲ぶ

原田 正史

澤田 勇先生は2009年2月9日交通事故のために突然亡くなりました。長年の調査の山歩きのために痛めた膝のリハビリに行き、その病院からの帰り、自宅近くの狭い道で横から出てきた車にはねられたそうです。車のスピードは出ていなかったようですが、頭を強打し、それが致命傷になったとのことでした。

時々、現役のころと少しも変わらない元気なお声で電話や、また別刷りなどを送っていただいていたので、驚くとともに、残念でなりません。

澤田先生はコウモリ調査のため日本各地を歩かれ、最も多くの洞窟を調査された一人であると思います。洞窟のコウモリ調査では、その洞口は森や茂みの中にあり、情報だけではたどりつくことさえ困難です。澤田先生は教育大学の特性を生かし、各地の教育委員会に連絡され、洞窟の情報や調査の協力を得るなど事前の準備は万全でした。また、各地でコウモリの研究をしている方々とのネットワークもひろく密に取られ、調査を進められていました。その縁で澤田先生と知り合いになられた方も多いと思います。調査から帰ってくると、標本を整理されるとすぐに、調査でお世話になった方々へ礼状を出されるなど、研究者として多くの手本を示して下さいました。ここに先生のこれまでの研究の一端を紹介し、追悼文としたいと思います。

先生のご履歴

生年月日：大正8年9月21日（1933年）

出生地：岐阜県羽島郡

ご学歴：

昭和15年3月（1940年）	岐阜県師範学校本科卒業（21歳）
昭和16年3月（1941年）	岐阜県師範学校専攻科卒業（22歳）
昭和19年9月（1944年）	東京高等師範学校理科卒業（25歳）
昭和22年9月（1947年）	東京文理科大学卒業（28歳）
昭和22年10月～26年3月	岐阜県大垣高校などで教員
昭和26年4月（1951年）	奈良教育大学就職（32歳）
昭和60年3月（1985年）	退職（奈良教育大学名誉教授：65歳）
昭和60年4月（1985年）	奈良産業大学教授
平成7年3月（1995年）	奈良産業大学退職（75歳）

先生は大学卒業以来、研究テーマは家禽・野生動物に寄生する条虫類の分類学的研究に終始されました。奈良教育大では1951－1965年まで『鶏に寄生する条虫類の発育史および鶏に寄生する条虫類の駆虫薬の開発並びに野生動物に寄生する条虫類の分類学的研究』、1966年から1985年まで『日本並びに近隣諸国の洞窟に生息する小型コウモリに寄生する条虫類の分類学的研究』、更に奈良産業大学時代（1985－1995）は『コウモリおよび食虫類に寄生する条虫類の分類学的研究』をされました。

調査では現地でコウモリの腸管の採取、固定、それを研究室に持ち帰り実体顕微鏡下で腸管を解剖し、寄生虫の探索。寄生虫が出てきた場合には、線虫、球虫はそれぞれ専門の研究者に送られました。条虫（サナダムシ）はスライドガラスの上で固定液をかけながらよく観察できるように整え、カバーガラスをかけ標本を作製します。顕微鏡下で標本の頭節（0.2mm）、額嘴鉤（0.04mm）、虫卵（0.02mm）の観察と写真撮影および成熟片節（約1mm）のスケッチをし、データを取られました。

また、1974年には1月から12月まで毎月、奈良から広島県東城町帝釈まで出かけられ、その洞窟に生息するコウモリの生息数の季節的変動と条虫の季節的消長を調査されていま

す（奈良教育大紀要、1980）。高速道路もない時代に JR を乗り継いで毎月調査に行かれた努力に頭のさがる思いです。

奈良教育大学に在職中は、休みは元旦だけで、あとは日曜祭日も大学の研究室で仕事をしておられたと奥様に聞きました。発表された論文は 1990 年代が最も多く、1991 年だけで Proc. Japan. Soc. Syst. Zool. (英文 2 報) ; Bull. Biogeogr. Soc. Japan (英文 1 報) ; Jpn. J. Parasitol. (英文 3 報) ; Zoological Science (英文 1 報) ; 奈良産業大学紀要 (英文 1 報) の計 8 篇の英文論文を発表されています。これだけの論文を 1 年間で書くには、休日も休まずに研究室に行かないとできないことです。私がいただいた論文別刷りは 1976 年から 2008 年までのもので、英文論文 51 篇 ; 和文論文 32 編 ; 雑誌発表 31 篇、計 114 篇を発表されています。これらの業績は海外で高く評価されています。

奈良産業大学を退職されてからは、標本作成のための固定液（アルコール酢酸液）の蒸気で目を痛められたことや、また標本作成・分析が家では困難なこともあり、研究は中止されました。先生はコウモリの内部寄生虫の研究が中心でしたが、コウモリの保護についても強い関心を持っておられました。そこで調査に行かれた洞窟についてコウモリの生息状況などを『日本のコウモリ洞総覧こぼれ話』や『コウモリ談義』にまとめられ発表されていました。

先生に教えられたこと : 自分で調査に行き、採集、分析をされたこと。お世話になった方にはすぐに礼状を書かれたこと。調査結果や調査で明らかになったこと、観察したことを論文や雑誌に発表され、後世のヒトが使えるようにされたことなどがあります。

ここに謹んで澤田 勇先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(はらだ・まさし 大阪市立大学)



追悼文

## 澤田 勇先生を偲ぶ

箕輪 一博

2009 年 2 月 13 日朝の出来事は今も忘れることができない。いつものようにメールを開くと佐野 明氏より澤田先生が 2 月 9 日に交通事故にあわれ亡くなられたという。また葬儀は 11 日に行われたという。頭が真っ白になった。直に佐野氏と連絡をとり確認し、ご自宅にはお悔やみを申し上げた。それからというもの仕事に実がはいらず、ただただ澤田先生の思い出にふける一日であった。

澤田先生は 1919 年 (大正 8 年) 9 月 21 日、岐阜県羽島郡岐南町薬師寺で生まれた。大学は東京文理科大学 (現筑波大学) へ進み、1946 年 1 月に 8 歳年下のきよみさんと学生結婚された。澤田先生は話すのが苦手で、無口な自分に少しコンプレックスを持っていた。反対に、きよみ夫人は社交的で誰とでも明るく話ができるので、遺伝子的に無口な子は生まれないと考えておられた。翌年に大学を卒業したが、東京では食糧事情が極端に悪く研究生生活を諦めて故郷の岐阜に帰る。

そして 1949 年から 2 年間、GHQ による学制改革の真っ只中にある岐阜市立長良高校の教師となる。担当した教科は「生物」であったが、併設中学の卒業生と地方の新制中学との間の学習程度のギャップが大変であった。教科書がなく自分でガリ版刷りのプリントを 120 名分作り、さらに「生物」の理解を容易にする目的に、できるだけ機会をみつけて生徒を野外に連れ出した。野生生物の観察に重点をおき、生物の生き方にみられる不思議さにふれさせたのだ。経験が浅いため授業に関しては指導要領をかなり逸脱し



1994年8月22日 大沢鍾乳洞でのコウモリ調査にて

た高度な内容であったようだが、当時の生徒は純情で何ら文句を言わないでついてきてくれたと感じておられた。

それから50年以上も過ぎた2002年5月、当時の生徒が同窓会を開き、澤田先生を招いた。1995年に長年の功績による勲三等旭日中綬章の叙勲の祝いもあったが、ひたすら生徒のためと純粋な教育を目指し全力投球で教壇に立たれた熱血先生を慕うものであった。生徒に対して厳格であったこと。中学卒業生と地方から入学した新制中学卒業生を差別しなかったこと。教科書がなかったので授業のはじめに分かり易い数枚のプリントを必ず配ったこと。野外観察を重視して生物の面白さを教えてくれたことなどが生徒の頭に残ったらしい。

1951年4月から大学時代の恩師の勧めとニワトリの寄生虫の業績が認められ（日本寄生虫学会の小泉賞と奈良県文化賞を受賞）、奈良学芸大学（現奈良教育大学）の教員となった。1965年度から始まった文部省総合研究コウモリ班の一員となり、コウモリに寄生する条虫の分類学研究を始めた。それ以降、1995年まで44年間、

奈良産業大学と二つの大学で二度の定年むかえた。偉大な研究業績は原田正史先生が詳しく紹介するので、私の思い出のみ紹介する。

私は大学では日本史学を専攻し、新潟県庁と建設会社に勤務した時代は発掘調査の仕事が殆どであった。一級土木施工管理技士など土木関係の資格を10以上取得し生涯、建設関係に従事しようと考えていたが、柏崎市立博物館開設に伴い博物館学芸員として転職した。

展示の準備段階で、自然系を担当することになり何か得意分野を見つけなければならぬと考えていた。柏崎市には福浦狸々洞にコウモリ類が多数生息しており、この報告が起点となり、澤田先生からお便りをいただきお付き合いが始まりコウモリにのめり込んだのである。福浦狸々洞はコウモリ類の繁殖洞であり、冬眠洞を探す使命を受け、バンディング法の指導など調査方法を教わった。

1991年11月28日、初めて澤田先生にお会いし福浦狸々洞のユビナガコウモリが冬眠

洞として使用している旧谷根トンネルを案内した。以降8回、新潟県や山形県にお越しになり一緒に調査し、深い思い出をつくった。山形県鶴岡市の民宿に泊まった時、小さな風呂に入り背中を流し本当に裸の付き合いをしたこと。福浦狸々洞の調査では原田先生も同行され、もう少しで落盤事故になりかけたこと。当時は小太りであったのか狭い洞穴に入り身動きができなくなったこと。水滴によりビデオカメラが故障して、感動の場面が撮影できなかったことなど、昨日のように思い出せる。

澤田先生は植物、特にエビネに興味を持たれていたことから、柏崎市の中嶋清一郎氏を紹介したところ、生前は私以上にお付き合いされていた。全国のコウモリ調査に訪れた際に、そ



1992年3月23日 旧谷根トンネルでのコウモリ調査にて



# 韓国におけるコウモリ調査 (2008年)

山本 輝正・佐藤 顕義・三笠 暁子・野口 郊美



図1 忠州市と調査地の位置



写真1 セコジ地域の道路側は切り土された

## はじめに

2007年、韓国忠清北道の忠州市 (Chungju-si) で行われている道路拡張・開設工事に伴い、コウモリ類が利用している洞窟類に影響が出る恐れのあることを危惧した忠州環境運動連合の朴一善氏 (通称: パクさん) から調査等の依頼を受け、2007年12月にコウモリの会有志が忠州市のセコジ地域でコウモリ調査を行い、その道路建設に関する裁判にも参加した。本報告は2008年にも調査依頼があったので再びコウモリの会有志を募って調査を行ったものである。

以下は前半に調査の経緯や状況、韓国の事などについて簡単に述べてあるので、調査の詳細な報告は後半の「調査結果」を参考にされたい。本文中のコウモリの和名は阿部ほか(2005)および白井(1993)に従った。

## 出発まで

2008年10月27日、韓国のパクさんから、今年も韓国に来てクロアカコウモリ *Myotis formosus* の調査をして欲しいとのメールをもらい、2007年調査メンバーの山本・三笠・佐藤に加えて野口も調査に参加することとなった。調査の日程を12月18日～21日と決めて航空機の予約も済んだころ、11月4日にパクさんから11月17日に行うセコジ地域の裁判資料を作成して欲しいとの連絡があり、急遽、昨年の調査結果を基にした工事の問題点などをまとめた資料を作成して送付した。これで準備は整ったと思った12月15日に、調査中日の12月20日にパクさんの結婚式があるとのメールがあり、一同唖然とした。韓国では様々な催しを行う場合は占いに頼ることが多く、こちらの調査日程を伝えた翌日、パクさんらの結婚式の日取りを占ってもらったところ、20日が最良との結果が出たとのことであった。国の風習ならば仕方がないと出席を覚悟し、プレゼントの相談をしていたところ、翌々日の17日のメールでは結婚式で日本の曲を1・2曲歌って欲しいとの要望があったが、さすがにこれはお断りした。

昨年も出発までに慌ただしいやり取りがあり、クロアカコウモリの生息洞に入洞できなかったが、今年は入洞できるだろうかという不安を抱き、年末の仕事を整理して韓国へ出発した。

## 忠州市へ 12月18日 (木)

16時30分、韓国の仁川国際空港で4人全員が集合。今回の通訳は前回の裁判で通訳をしていただいた中沢さん。バスに乗りソウル市乗り換えて、20時30分ごろ忠州市のバスターミナルに到着し、1年ぶりにパクさんと再会する。21時からパクさん宅で食事をして、22時よりホテルで打ち合わせ。昨年の裁判で裁判長から忠州市に忠州環境運動連合の許可なしでは工事等を進めてはならないとの命令があったにもかかわらず、その後も忠州市は工事を進め、洞窟のゲートの鍵も貸してくれないとのことであった。韓国では司法の命令を無視しても構わない様でとても残念な思いであった。しかし、パクさんがツテを使って入手した忠州市全域にわたる洞窟調査の報告書 (忠州市 2008) を見せていただいたところ、セコジ地域以外の洞窟にもクロアカコウモリが数ヶ所確認されているこ

とがわかり、それらの洞窟のすべてにはすでに入口にゲートが取り付けられているとのことであったが、とりあえずセコジの洞窟とその他の洞窟の調査を行う方針を決めて、未明の就寝となった。

### 洞窟調査1日目 12月19日(金)

朝8時にホテルを出発し、セコジ地域へ移動(図1)。予想通り道路側斜面は伐採され、尾根部も道路側は切り土となり道路幅が拡張されていた(写真1)。また、湿地側には籠網による石垣が高さ約20m・幅30~40mで積み上げられており、尾根から湿地内への見晴らしがよくなっていた。セコジの湿地へ下りると尾根部の樹木伐採と石垣によって湿地内が昨年と比べて非常に明るく感じられた(写真2)。また、昨年は見られなかった巣箱が湿地内の樹木や石垣、岩崖に多数取り付けられていた。A洞窟(No.33:忠州市(2008)による地点No。以下Noのみとする)を見に行くと、入口ゲートは上部からの落石で一部が壊れて外れていた(図2・写真3)。これは元々ゲートが入口を斜めに塞ぐ傾斜した形で設置されていたためで明らかな設計ミスと思われる。さらに破損を放置したままの対応にも問題があると感じられた。ゲートが外れていたので入洞は容易であった。入口付近で *Myotis* 属の一種がドリル穿孔跡の2ヶ所に各1個体見られた。韓国でもコウモリ類の捕獲には許可が必要であるが、パクさんが捕獲許可を受けていないことからこの個体を触れずに観察した結果、側膜の後足へのつき方からドーベントンコウモリ *Myotis daubentonii* であると判別できた(写真4)。入口から少し入るとキクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* 3個体が単独で見られたが、クロアカコウモリは見つからなかった。洞内ではゲートが壊れていたためか、キバノロとタヌキの足跡が見られ、所々設置してある温湿度計のついた棒が倒れていた。これらを修復しない対応についても問題があると感じられ、調査や監視を放棄しているのではないかという印象を受けた。出洞してゲートを正常な位置に戻し、B洞窟(No.34)(図3)へ移動した。No.34では①エリアでキクガシラコウモリを計6個体を確認。②のゲート前でゲートや温室度の計測を行っていたところ、ゲートの脇に人



写真2 セコジ湿地内部。周囲の木は伐採され、高い石垣が作られていた。湿地内部には巣箱が架けられていた

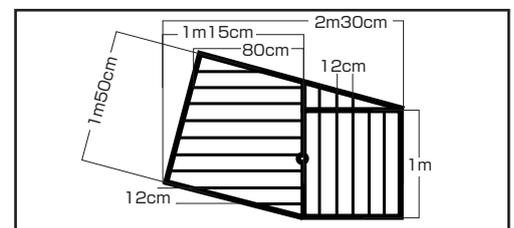
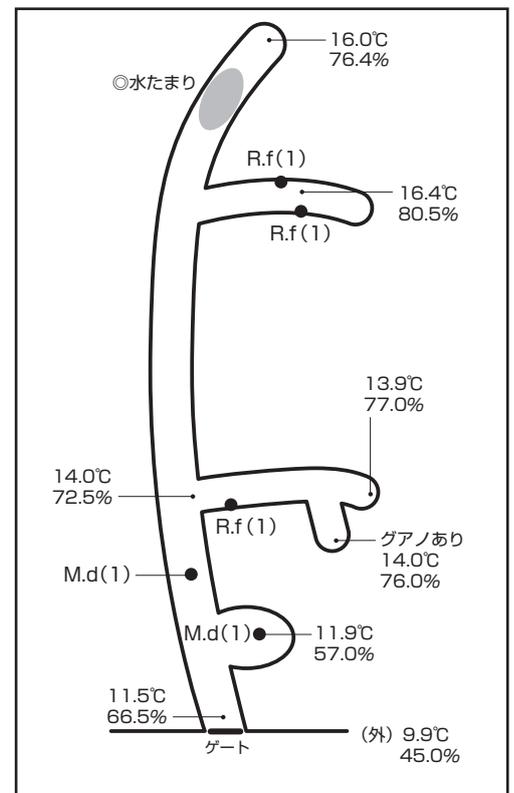


写真3 セコジA洞窟(No.33)の壊れたゲートと洞口前の枯木(右からパクさん、野口、中沢さん)。出洞時の撮影のため調査者の湿気が写っている



写真4 セコジA(No.33)のドーベントンコウモリ

図2 A(No.33)の見取り図と温湿度、ゲート寸法。  
R.f: キクガシラコウモリ  
M.d: ドーベントンコウモリ  
M.f: クロアカコウモリ  
P.s: オオアブラコウモリ  
(以下図同様)



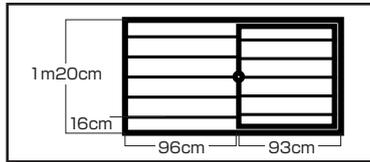
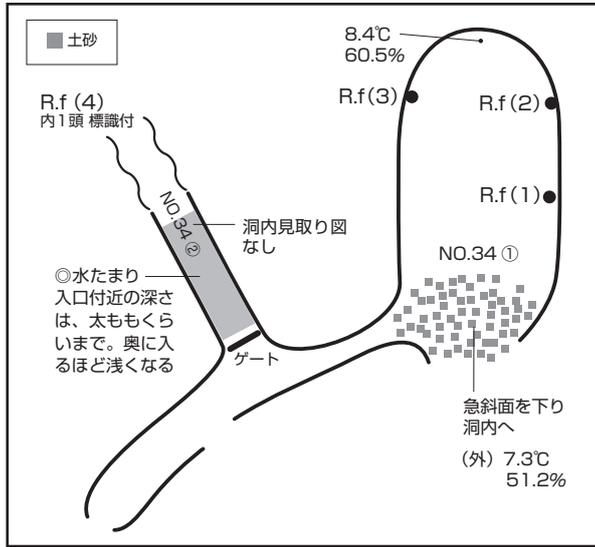


図3 セゴジ B(No.34)の見取り図とゲート寸法

が通れる幅が空いていることに気がつき、スリムな女性陣2名(男性2名は自ら断念)が洞長を履いて入洞した。その結果入口付近でキクガシラコウモリ4個体を確認したのみで、ここでもクロアカコウモリは見つからなかった。

セゴジ湿地内の忠州市が行ったクロアカコウモリ用の保全工事の状況を調査すると、休息地として植林された竹の上部がすべて均等な高さで切られてその多くの竹が枯れていた(写真5)。また、竹林周辺には上部が切れて根の付いたままで枯れた竹が多数放置しており、植林が成功していないと判断できた。なぜ上部を切った竹が植林されていたかの詳細は不明であるが、竹の高さがあまりにも均一であったため、輸送・移動などの際の制限で切った竹を土に埋めただけのものではないかと思われた。さらに、湿地内の巣箱の中には小型の猛禽類(フクロウ類)が利用できる大きな穴が正面に開いたものが複数見られ、これはコウモリ類を捕食する種を誘引してしまう可能性が高い。また、A洞窟(No.33)の正面には高さ5~6mの枯れ木が残されており(写真3)、これは出洞するコウモリを待ち伏せる捕食者の絶好の狩場(待ち伏せ場所)となることが推測されるが、この枯れ木の存在理由も不明である。



写真5 保全対策で植林された竹(上部が切られすでに枯れたものが多い)

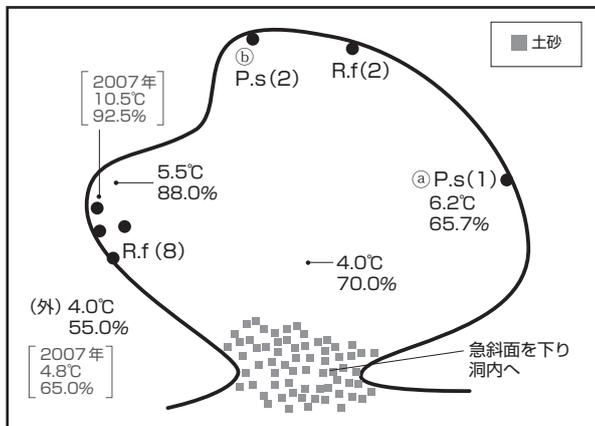


図4 セゴジ Cの見取り図。この洞窟はゲートはない

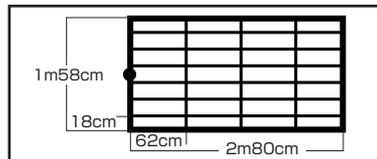
その後、我々の2007年調査でクロアカコウモリ1個体を確認したC洞窟へ向かう(図4)。ここは工事による改変部から近接(40m程度)した洞窟であるにもかかわらず、忠州市の調査では発見されていない地点であり、忠州市の調査精度を疑う洞窟である。入口から急峻な斜面を下ると、昨年同様、キクガシラコウモリを計10個体確認した。この時、山本が発見した側壁のドリル穿孔跡にいた個体を撮影して詳細に検討した結果、オオアブラコウモリ *Pipistrellus savii* (写真6)であることが判別でき、周辺を詳しく調査した結果、運よく壁面の浅い窪みで休息していた2個体の前腕長を触れずに計測することができた。しかし、クロアカコウモリは確認することができなかった。その他、セゴジ湿地ではコゲラ、ヒヨドリ、シジウカラを確認した。



昼食のためパクさん宅へ戻り、午後からは仰城面(アンソンミョン)地域のクロアカコウモリ生息洞(No.61・62)へ向かう。ここは谷地形の中腹左右岸に掘られた鉱物の採掘跡地であったが、谷入口が大規模な採石場となっており、パクさんの口頭説明で許可を受けて入場させてもらった。採石場上段から5分ほど歩いて右岸のNo.62に到着する(図5・写真7)。ここにもゲートが設置されていたがゲート幅が広かったため全員容易に入洞できた。この洞窟は枝分かれした支道が多く、一部、落石により狭まっている場所や入口以外に2ヵ所の洞口が見られ全体として比較的乾燥し気温も低かった。主道は谷と平行して掘ら

写真6 セゴジ Cのオオアブラコウモリ

図5 アンソンミョンNo.62の見取り図とゲート寸法



れており 200 m程度まで調査したが最深部までは到達できなかった。この洞窟ではややまとまった位置でオオアブラコウモリを計 19 個体、点在してキクガシラコウモリを計 2 個体確認した。さらに、天井部が低くなった支道の先で山本がクロアカコウモリを 2 個体確認した (写真8・9)。クロアカコウモリが休息していた場所は洞内の他の場所と異なり、狭くなった部分のため空気の対流がなく温度 12.3 ~ 12.6°C、湿度 92.1 ~ 93.9% (いずれも n=2) で、他の洞内温室度 (No. 62 のオオアブラコウモリ確認地点: 7 ~ 7.3°C, 55 ~ 56.5%, n=2) に比較して高めであった。次に左岸に掘られた No. 61 へ移動すると、ここにも No. 62 と同じようなゲートが設置されていた (図6)。時間の関係上、2 名が入洞すると入り口付近でキクガシラコウモリ 1 個体、100 m ほど入った中心部から最深部にかけて点々とクロアカコウモリを計 8 個体確認することができた (写真10・11)。この洞窟は非常に湿度が高く、クロアカコウモリの休息していた場所を 1ヶ所ずつ計測すると、温度 11.4°C ~ 12.7°C、湿度 94.4% ~ 95.5% (いずれも n=7) で外気温度 4.6°C、外気湿度 59.1% と比較して高くなっていた。洞窟からの帰路で鳥類のオナガを確認した。その後、翌々日に調査を行う予定の蘇台面 (ソテイミョン) 地域の洞窟 (No. 18) と貴來面 (キライミョン: 江原道, 原州市) 地域の洞窟 (No. 25) の位置を確認するため踏査を行ったが No. 18 を見つけた時点で日暮れとなったためこの日の調査を終了した。再びパクさん宅で夕食をいただき、20 時から忠州環境運動連合の

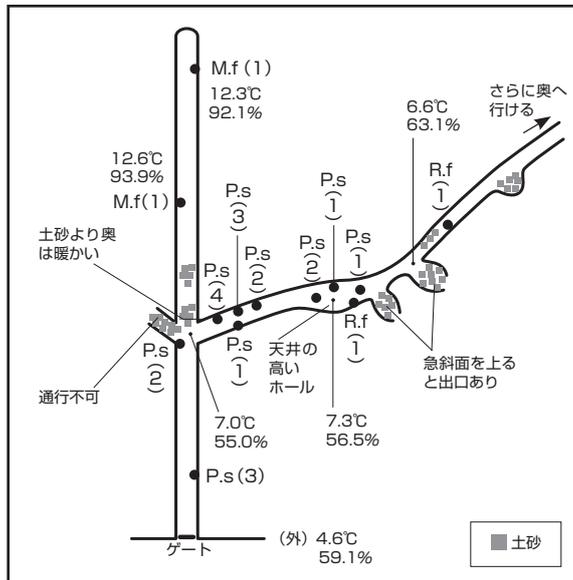


写真7 アンソンミョンNo.62の洞窟入口とゲート



上: 写真 8,9 アンソンミョン No.62 のクロアカコウモリ (山本撮影)  
下: 写真 10 アンソンミョン No.61 でクロアカコウモリ 2 個体を調査するパクさん

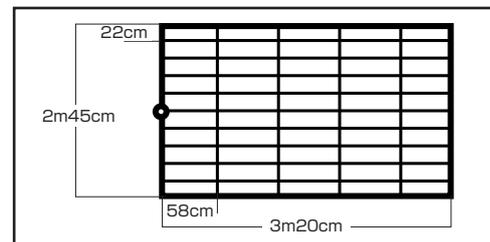
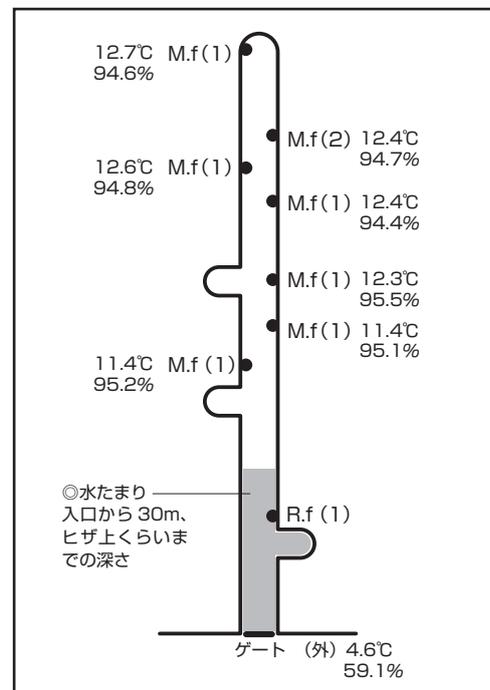


図6 アンソンミョンNo.61の見取り図とゲート寸法



写真 11 アンソンミョン No.61 のクロアカコウモリ

事務所で調査結果の取りまとめと今後の予定について協議を行い、未明にホテルへ戻り就寝となった。

### 洞窟調査2日目と結婚式 12月20日(土)

朝7時にホテルを出発してパクさん宅で朝食をいただく。1時間ほどで出発して2007年にも調査を行ったD洞窟(No.31)およびE洞窟(No.36)を調査(図7・図8)。D洞窟では計16個体、E洞窟では1個体のキクガシラコウモリを確認した。E洞窟からの帰路ではミヤマカケスと

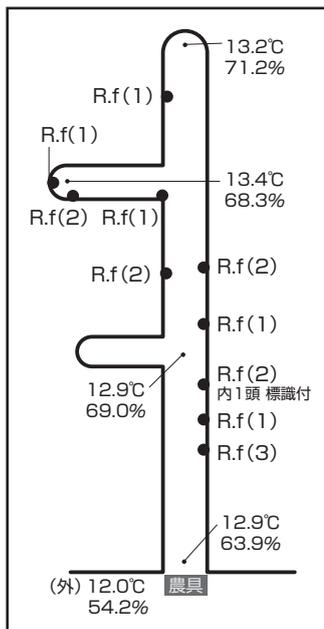


図7 セソジD(No.31)の見取り図。ゲートはない

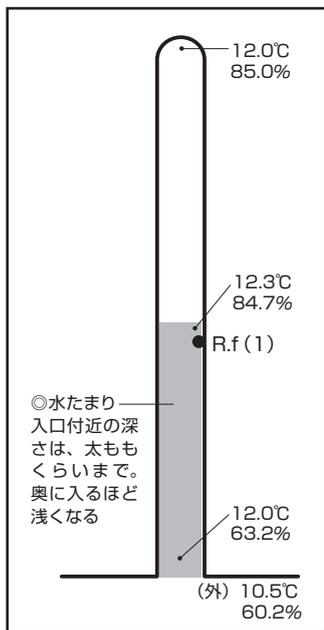


図8 セソジE(No.36)の見取り図。ゲートはない

コウライキジを確認した。

12時からの結婚式に備えて、10時30分にホテルへ戻る。多少の着替えを行って11時30分に式場へ移動。会場は教会形式で到着後すぐに開始された。パクさんはタキシード、奥さんはウエディングドレス姿で入場。やや緊張ぎみのパクさんは普段とは全く別人のようであった。日本からの調査団代表として山本が英語および日本語で祝辞を述べ、それを通訳の中沢さんが韓国語で伝え、三笠がプレゼントを手渡し、出番が終わり一同安堵した。

その他、中国や他国の方々からの祝辞があり、パクさんの活動の広さが伺えた。結婚宣誓後のご両親への挨拶では感極まったパクさんが涙する場面もあり(写真12)、ケーキカット、パクさんのあいさつなどが続き、最後は親類一同で記念撮影を行って終了した。約40分程度の式であったが質素で温かい結婚式であった。昼食は式場の上階の大きなレストランでバイキングをいただいた。結婚式の参列者も大勢いて披露宴のようであるが、他の拳式組と分別がなく大賑わいである。着替えを済ませたパクさん夫妻が身内を見つけては挨拶に回っているが、結局、我々も含めて食事を堪能していた。この時、以前通訳をしていただいたキムさんと偶然会った。たまたま知り合いの結婚式に参列しに来てパクさんの結婚は知らなかったとのことで、暫しの談笑後、再会を約束して別れた。



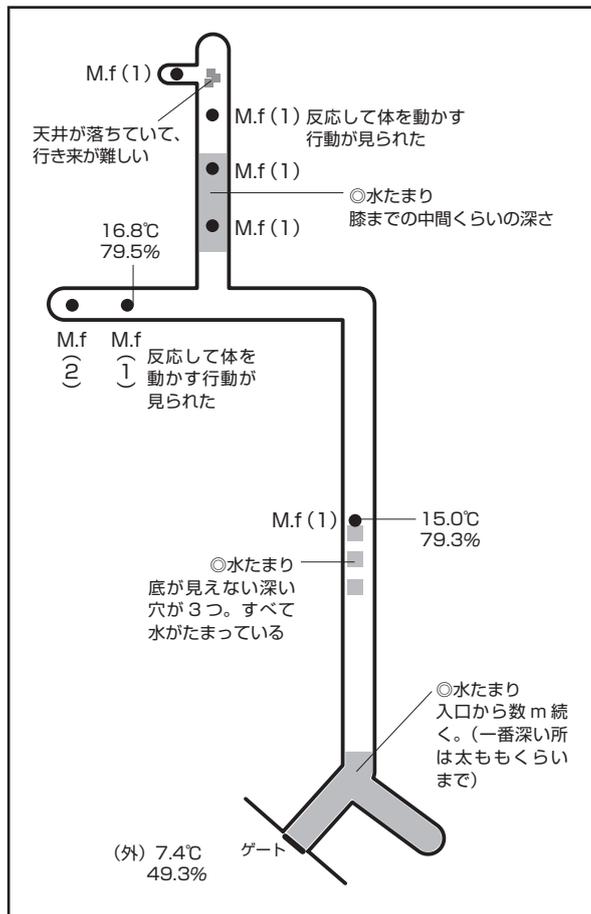
写真12 パクさん夫妻の結婚式(感極まっているパクさん)

食後は初めて昼間の忠州市を散策し、家具店にある筆筒の取っ手にデザインされたコウモリを見つけたり、書店でコウモリ関係の書籍を捜したり、露天市場やスーパーマーケットで日本へのおみやげを物色した。そしてパクさんを除いて忠州環境運動連合の事務所で調査結果の報告書類を作成、それらをパクさん用に中沢さんが韓国語で翻訳した。その後、中沢さん行きつけの食堂で夕食。21時すぎにホテルへ戻り帰国の準備を行って、本日は早々と就寝した。

### 洞窟調査3日目と帰国 12月21日(日)

朝8時に荷物をホテルに預けて出発。パクさんと奥さん、そして奥さんのお母さんが調査に参加。通訳の中沢さんが参加できずやや不安であったが、奥さんのお母さんは3年前までに茨城に住んでいたとのことで日本語がかなり通じてとても助かった。食堂で朝食をいただき、19日に下見したソテイミョン地域のNo.18へ移動(図9)。入口にはゲートが設置されていたが、ここも容易に通れる幅であったため、パクさんを含めて4名が洞長を履

図9 ソテイミョンNo.18の  
見取り図とゲートサイズ



いて入洞した。クロアカコウモリを計8個体確認した(写真14)。この洞窟も外気の温湿度(7.4°C, 49.3%)と比較して温湿度が高く、クロアカコウモリが休息していた場所を1ヶ所ずつ計測すると、温度は15°C~16.8°C、湿度は79.3~79.5%であった(いずれもn=2)。帰路の車中、河川で休息するオオハクチョウの群れを確認した。

忠州市11時40分発のバスに間に合うようにバスターミナルへ到着。パクさん一家とは再会を約束してここで別れた。バスはソウル市のバスターミナルを経由して仁川国際空港に15時30分ごろ到着。三笠・野口・佐藤は17時10分発、山本は18時55分発の飛行機に搭乗して帰国、成田ではコウモリの会事務局の水野氏が出迎えてくれた。しばしの談笑後それぞれの家路についた。

## 調査結果

### (1) 韓国のコウモリについて

韓国で確認されているコウモリ類は3科24種(Choi,2006)または3科26種(Sang-Hoon,2006)とされている。このうち絶滅が危惧されている種として1998年にクロアカコウモリを絶滅危惧種I(Endangered species I)に、2004年にウサギコウモリ *Plecotus auritus* およびコテングコウモリ *Murina ussuriensis* を絶滅危惧種IIに、さらにクロアカコウモリを2005年に国の天然記念物452番(Natural Monument No.452)に指定している。また、クロアカコウモリはこれまでに20回程度の採集記録があるとされている(Won,2005; Sang-Hoon,2006)。

### (2) 現地調査結果

2007年12月22~23日及び2008年12月19~21日の調査で確認したコウモリ類は2科4種、すなわちキクガシラコウモリ科のキクガシラコウモリ、ヒナコウモリ科のクロアカコウモリ、ドーベントンコウモリ、オオアブラコウモリであった(表1)。

キクガシラコウモリは2008年調査で8地点中7地点の計43個体を確認した。数個体~10個体前後で休息している洞窟が見られたが、50個体以上などの大規模な集団は見られなかった。主に洞口近くで確認される場合が多く標識された個体も確認した。

クロアカコウモリは2007年調査で4地点中1地点の計1個体、2008年調査で8地点中3地点の計18個体を確認した。洞窟内で休息していた位置で計測した温度は11.4°C~16.8°C、湿度は79.5%~95.5%と非常に高く、いずれの地点も外気の温湿度よりもはるかに高い環境であった(表2)。また、確認できなかった洞窟と比較しても温湿度が高く、忠州市から南南西約250km離れた全羅南道の咸平郡(図1:ハンピョン郡)において2000年~2004年に調査された4ヶ所のクロアカコウモリ越冬洞窟の結果でも、高い温度と高い湿度が保たれた洞窟または洞窟内の場所を利用している

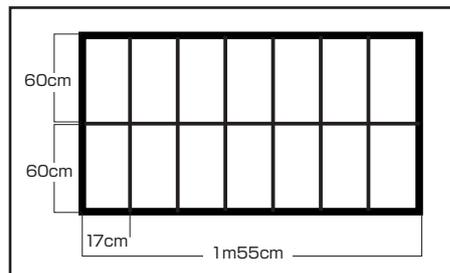


写真13 ソテイミョンNo.18の周囲の環境



写真14 ソテイミョンNo.18のクロアカコウモリ(山本撮影)

洞窟名	キクガシラコウモリ		クロアカコウモリ		ドーベントンコウモリ		オオアブラコウモリ		ゲートの計測値(cm)
	2007年	2008年	2007年	2008年	2007年	2008年	2007年	2008年	高さ*幅*格子間隔
セコジA (No.33)	—	3	—	0	—	2	—	0	150*230*12
セコジB (No.34)	*12	4+*6	0	0	0	0	0	0	120*189*16
セコジC	10	10	1	0	0	0	0	3	ゲートなし
セコジD (No.31)	25	16	0	0	0	0	0	0	ゲートなし
セコジE (No.36)	0	1	0	0	0	0	0	0	ゲートなし
ソテイミョン (No.18)		0		8		0		0	155*120*17
アンソンミョン (No.61)		1		8		0		0	245*320*22
アンソンミョン (No.62)		2		2		0		19	158*280*18
合計	47	43	1	18	0	2	0	22	

表 1 洞窟別コウモリ確認状況 (2007・2008 年)

注 1) \*:ゲート外の個体数を表す。  
 -:入洞不能, 空白:未調査。  
 注 2) 洞窟名の括弧内No.は忠州市 (2008) 調査No.を示す。

と報告されており (Sun-Sook,2006)、同一条件下の環境を有する忠州市の生息洞窟もクロアカコウモリにとって安定した越冬地であることが判明した。

ドーベントンコウモリは 2008 年調査で初めて確認したが 1 地点計 2 個体と少なかった。オオアブラコウモリは 2008 年調査で初めて確認できた。8 地点中 2 地点の計 22 個体であったが、No. 62 地点では 19 個体が洞口から 2 番目の開口部間に集中して 1~4 個体で休息していた。韓国では *Pipistrellus* 属が 3 種類、すなわち、ジャワアブラコウモリ *P. javanicus*、オオアブラコウモリ *P. savii*、モリアブラコウモリ *P. endoi* が確認されている (Choi 2006)。調査では個体に触れず前腕が計測可能だった 2 個体の計測値が、37.1 cm・37.4 cmであったことからオオアブラコウモリと同定した (今泉,1960; Yoshiyuki,1989; 阿倍ほか,2005; コウモリの会編,2005)。なお、ジャワアブラコウモリの前腕長は、Andrew T. ほか (2008) の 30-36 mm、および Charles M. (2008) の 30-36 mmを参考にした。

(3) セコジ地域における工事の影響

忠州環境運動連合の調査結果 (朴氏, 私信) および忠州市 (忠州市,2008) とコウモリの会有志で行った調査結果を取りまとめて表3に示す。セコジ地域でコウモリ保全対策工事が開始されたのは 2007 年 8 月で (水野,2007)、それ以降、セコジ地域でのクロアカコウモリの個体数が減少し、2008 年 12 月の調査では過去に生息を確認した 3 つ洞窟のすべてでクロアカコウモリが姿を消した。これらのことは、工事が行われていない他の 2 地域の個体数変動をみれば、その年の気象条件等の自然環境の影響ではないことが裏付けられる。従ってセコジ地域においては道路工事と保全対策工事の影響によって本来の生息環境が失われ、再生(保全)もされずにクロアカコウモリがいなくなってしまうと考えられる。また、2007 年の裁判では、忠州市がセコジ地域のクロアカコウモリにラジオテレメトリー調査を実施し、「飛び出さない個体もいた」と述べているが (三笠,2007)、おそらく個体数が多かった 2006-2007 年の越冬期に行われた可能性が高く、個体の捕獲時期や方法などの影響で個体数が減少した可能性も高い。これは捕獲等の影響を受けていないセコジ A・B・C 洞窟のキクガシラコウモリの個体数 (表1) を見ると、2007 年は 2 地点で 22 個体 (A はゲートがあって入洞できなかった)、2008 年は 3 地点で 23 個体と個体数に変動がなかったことからセコジ地域のクロアカコウモリのみに対する人為的影響が推察される。

忠州市は忠清北道に属し、人口約 22 万人、面積約 983 km<sup>2</sup>の地方都市である (忠州市, 不明)。忠州市は忠州市全域及び周辺地域で洞窟 84 地点の調査を行い、5 地点でクロアカ

表 2 洞窟内の温湿度比較 (2008 年)

注 1) 計測地点: クロアカコウモリ休息場所の他、洞窟の最深部、曲がり角などで計測。  
 個体数: クロアカコウモリの個体数。  
 注 2) 休息場所の値: クロアカコウモリが休息していた場所の値。

洞窟名	温度(℃)	湿度(%)	計測地点	個体数	外気温湿度		備考
					(℃)	(%)	
セコジA (No.33)	11.5-16.4	57-80.5	7	0	9.9	45	
セコジB (No.34)	8.4	60.5	1	0	7.3	51.2	ゲート内未計測
セコジC	4-6.2	65.7-88	3	0	4	55	
セコジD (No.31)	12.9-13.4	63.9-71.2	4	0	12	54.2	
セコジE (No.36)	12-12.3	63.2-85	3	0	10.5	60.2	
ソテイミョン (No.18)	15-16.8	79.3-79.5	2	8	7.4	49.3	
アンソンミョン (No.61)	11.4-12.7	94.4-95.5	7	8	4.6	59.1	休息場所の値
アンソンミョン (No.62)	12.3-12.6	92.1-93.9	2	2	4.6	59.1	休息場所の値

洞窟名	忠州環境運動連合調査			忠州市調査	コウモリの会調査	
	2004-05年	2005-06年	2006-07年	2007-08年	2007年12月	2008年12月
セコジA (No.33)	1	1	4	3	—	0
セコジB (No.34)	2	1	5	0	—	0
セコジC					1	0
セコジE (No.36)		1	0		0	0
ソテイミョン (No.18)				13		8
クライミョン (No.25)				6		—
アンソンミョン (No.61)				9		8
アンソンミョン (No.62)				2		2
合計	3	3	9	33	1	18

コウモリを計 33 個体記録している (表3: 忠州市, 2008)。一方、韓国南部のハンピョン郡 (図 1) では約 100k m<sup>2</sup> 範囲内の 22 洞窟のうち 4 地点で 130 個体前後のクロアカコウモリを記録している (Won, 2005)。両者を比較すると忠州市に生息するクロアカコウモリの個体数は明らかに少なく、また、生息環境の指標となる高温・高湿度を有した洞窟が少ないことも明らかである。さらに、過去に生息を確認した地点を考慮すると、セコジ地域の A・B・C は隣接し、クライミョン地域の No. 25 は位置が確認できなかったが地図上ではソテイミョン地域の No. 18 と道路を挟んで隣接し、アンソンミョン地域の No. 61・62 は谷を挟んで向かい合わせであることから、忠州市および周辺地域に生息するクロアカコウモリはわずか 3 地域のみが生息していたといえるが、このうちのセコジ地域に生息していたクロアカコウモリの生息地を失ったことは韓国中部の個体群を維持する上において甚大な影響を及ぼすことが懸念される。

表 3 クロアカコウモリの洞窟別個体数変化

- 注 1) 忠州環境運動連合調査: 朴一善 (私信)。忠州市調査: 忠州市 (2008)。  
注 2) 年をまたいだ調査期間は冬季を示す。  
注 3) 洞窟名の括弧内 No は忠州市 (2008) 調査 No を示す。  
注 4) —: 入洞不能。空白: 未調査。

## 謝辞

2 年間で 9 日間の滞在期間中、計 5 日程度の調査であったが、韓国では多くの方々にお世話になった。朴一善氏を始め忠州環境運動連合のスタッフの方々、朴氏のご家族、朴氏の奥さんとそのご家族、通訳の朴日花さん・中沢みゆきさん、その他、お名前を聞かないままでも大変親切にいただいた忠州市の皆様にはこの場を借りてお礼を申し上げます。

## 引用文献

- 阿倍 永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明, 2005. 日本の哺乳類 (改訂版). 東海大学出版会, 東京, 206pp.  
Andrew T. Smith・Yan Xie, 2008. A Guide to the Mammals of China, Princeton University Press, New Jersey, 544pp.  
今泉吉典, 1960. 原色日本哺乳類図鑑. 保育社, 大阪, 196pp.  
Won, Pyong-Oh, 2005. Endangered Wild Species in Korea, Kyo-Hak Publishing Co., Ltd, Korea, 374pp.  
コウモリの会 編, 2005. コウモリ識別ハンドブック. 文一総合出版, 東京, 69pp.  
白井祥平, 1993. 世界哺乳類名検索辞典 (学名編). 原書房, 東京, 499pp.  
Charles M. Francis, 2008. A Field Guide to the Mammals of South-East Asia, New Holland Publishers Ltd, London, 392pp.  
忠州市, 2008. 忠州市廢鉸山地域のコウモリ生息実態調査結果報告書, 190pp. (韓国語).  
忠州市, 不明. 観光忠州 (パンフレット), 忠州市.  
Choi, Byung-Jin, 2006. The conservation and rarity of Korean bat, 2006 International Seminar on the Conservation and Management of Endangered Bats : 73.  
Sang-Hoon Han, 2006. Natural History and Status of Bats in the Korean Peninsula, 2006 International Seminar on the Conservation and Management of Endangered Bats : 45.  
Sun-Sook Kim, 2006. Hibernacula Characteristics and Hibernation Ecology of Myotis formosus, 2006 International Seminar on the Conservation and Management of Endangered Bats : 3-4.  
三笠暁子, 2007. 韓国クロアカコウモリ裁判に参加して. コウモリ通信, Vol.16 No.1 : 34-35.  
水野昌彦, 2007. 韓国クロアカコウモリフェスティバルに参加して. コウモリ通信, Vol.16 No.1 : 27-28.  
Yoshiyuki, M. 1989. Systematic Study of Japanese Chiroptera. National Science Museum Monographs, Tokyo, 242pp.

(やまもと・てるまさ, さとう・あきよし, みかさ・あきこ, のぐち・さとみ コウモリの会)

# コウモリフェスタ 2008 in 沖縄こどもの国

吉岡 由恵



保護されて人工哺育中のオオコウモリの子どもも特別参加。子ども達に大人気でした



コウモリエコバッグ作り



観察会。コウモリのペリットが見つかった場所。コウモリは何を食べたのかな？



展示室。真夏の沖縄、クーラーのきいた部屋で、展示や塗り絵を楽しんでもらいました

2008年8月2日(土)3日(日)にかけて、沖縄こどもの国でコウモリフェスタが開催されました。沖縄こどもの国は沖縄島の中部の市街地にありますが、周りに森があり、夜になると多数のコウモリたちが観察できます。「コウモリ」とわざと書きましたが、沖縄島でよく観察できるコウモリは、クビワオオコウモリです。コウモリフェスタ初の小型コウモリではなく、オオコウモリがメイン！のフェスタでした。

沖縄こどもの国には2007年に琉球列島の野生動物たちの展示施設「アークおきまる」が完成しました。オオコウモリなど身近な生き物の存在に気づいてもらい、琉球列島独自の特異な生物相を学び、いつまでもこの生き物たちが生きていけるような世の中を考えていくための教育施設です。アークおきまるではクビワオオコウモリの一亜種、オリオオコウモリを飼育しています。オオコウモリは那覇のような市街地でもよく観察できますが、沖縄の人にとっては夜になると出てくる得体のしれない怖いものであるようで、世話をしていると「血すわれないの?」「襲ってこないの?」と質問されることもよくあります。こんなに観察しやすい身近な面白い野生動物のことをもっと知ってほしい!もったいない!以前からそう思っていたのでコウモリフェスタ開催に立候補させていただきました。

コウモリフェスタ会場では様々なコウモリたちの素敵な写真が展示され、コウモリに関するパネルやハンズオン展示物、コウモリグッズなどのコウモリ展(10月31日まで開催)も行いました。そして会場には、動物園ならではの!?人工哺育中の子どもコウモリにも参加してもらい、大人気でした。1日目のワークショップは大沢さんご夫妻、コウモリの会の方々と協力し「オオコウモリのお話」「オオコウモリのペリットを植えてみよう」「コウモリエコバッグ」「コウモリ紙ヒコーキとコウモリ折り紙」と盛りだくさんの内容です。そして夜はお楽しみ、オオコウモリ観察会です。この日は21時まで開園していたので、たくさんのお客さんが参加してくださいました。フェスタをやっていることを知らずに来園された方も、30人ほどの団体が夜空を見ながらオオコウモリを見ているので、興味を示してください、いっしょに途中から参加される方も多かったです。

2日目はコウモリの会総会と講演会です。船越公威先生の海外のコウモリのお話や、中本敦さんのオリオオコウモリの研究など、貴重なお話を聞けてとても面白く勉強になりました。恥ずかしながら、私も講演させていただいたのですが、皆様方に様々なアドバイスをいただけて、これもとても良い勉強になりました。最後ですが、オガサワラオオコウモリの保護に携わってらっしゃる鈴木直子さんもフェスタに参加してくださったので、オオコウモリ情報交換会もおこないました。これらの様々な方々とお話させていただいたことは、飼育の現場にもどんどん活かしていきたいと思います。

今回、コウモリフェスタをおこない、たくさんの方がオオコウモリという身近な動物に目を向けるようになってくれたと思います。そして、オオコウモリに対する嫌なイメージを良いイメージにかえてくれた人も多いと思います。沖縄でも悲しいことに身近な動物だったものが、どんどん見かけなくなってしまっています。そんな野生動物たちの存在に気づけるようになる最初の一步として、オオコウモリはとても良い動物なのではないかと考えています。今後も、沖縄こどもの国ではコウモリ普及活動をおこなっていきます。またいつか、さらなるコウモリフェスタを沖縄で開催していただきたい!と思います。

最後に、「コウモリフェスタ2008 in 沖縄こどもの国」の開催にあたり、ご尽力くださいましたコウモリの会の皆様、沖縄国際大学金城和三先生、琉球大学理学部進化生態学講座野生動物研究室の皆様、そして各地より参加してくださった皆様に、心から感謝申し上げます。どうも有り難う御座いました。

(よしおか・よしえ 沖縄こども未来ゾーン運営財団(沖縄こどもの国) 飼育課)

## トカラ列島エラブオオコウモリ紀行

大沢 啓子・大沢 夕志

## はじめに

クビワオオコウモリ (*Pteropus dasymallus*) は、鹿児島県の口永良部島からトカラ列島、更に沖縄の島々から台湾、フィリピン北部に分布する。地域によって5つの亜種に分類され、このうちエラブオオコウモリ (*P.d.dasymallus*) (写真1) は口永良部島からトカラ列島に分布している。その生息数については、口永良部島では50～100頭で推移していると予測されている(船越・國崎, 2003)ものの、7つの有人島と4つの無人島からなるトカラ列島(次ページ図1)については、中之島、平島、悪石島及び宝島に生息している(船越, 1990)とされているだけで数についてはよくわかっていない。トカラ列島での生息状況については、これまでに、船越(1990)、國崎(1999)、國崎(2002)などの調査報告があるが、最近の状況については不明だ。

今回、2008年の12月7日から12月17日まで、諏訪之瀬島に1泊、平島2泊、中之島3泊、悪石島に4泊滞在し、昼間は集落や集落周辺を中心に踏査してオオコウモリのペリットや食痕を探し、夜間は飛来状況を観察した。その結果や各島の植生から推測される各島のオオコウモリ生息状況、合わせて滞在中に見た各島の様子などを報告したい。

なお、筆者らは、これまでにトカラ列島のうちの3島を訪れている。1989年12月から1月にかけて宝島に行ったのが最初で、宝島には1994年7月にも一晩だけ訪れているが、どちらもオオコウモリが生息している証拠は見つからなかった。1993年7月と1994年7月には中之島に行っている。中之島は面積、人口ともにトカラ列島の中では一番大きく、スダジイなどの森が発達していて、トカラウマの放牧されている高原、標高979mの御岳など環境も多様で、バードウォッチングのポイントでもある。オオコウモリも海岸近くの集落周辺で毎晩見かけた。口之島には1998年末に3日間滞在し、洞窟にコウモリがいるという話を聞き、実際に小コウモリが1頭飛翔しているのを見たものの、オオコウモリは全く姿を見なかった。



写真1 クビワオオコウモリの亜種、エラブオオコウモリ(中之島にて)

## 諏訪之瀬島

フェリーとしま(以下「としま」)(写真2)は、トカラの7つの有人島に寄って生活物資と人を乗降させて、最後の宝島で引き返す便と、奄美大島まで行って引き返す便とが交互に週2回運航されている。昔も今もこの「としま」が唯一の生活の足となっている。1980年代に港が整備されたので、すべての島に「としま」が接岸できるようにはなったものの、特に小宝島と平島は、海が荒れれば「抜港」といって、接岸しないまま沖を通過してしまうことも珍しくない。また、ランプウェイ制限といって、港の波の様子によっては車乗降用のランプを降ろさないこともあり、今回のトカラ列島旅行中も何度もこの言葉を聞いた。鹿児島港をスケジュール通りに出航しないことも多く、今回も12月5日鹿児島港出港の予定が、悪天候のため一日遅れて6日出航になり、当初の予定より滞在が一日短くなってしまった。

12月6日23時50分に、「としま」は鹿児島港を出発した。翌7日の早朝から口之島、中之島、平島と寄港し、9時過ぎに諏訪之瀬島(写真3)に着いた。天気は曇り。栈橋に迎えに来てくれた宿の人の話ではオオコウモリは絶対いないという。周囲にいた何人かの人にも聞いて



写真2 トカラ列島と九州をむすぶ「フェリーとしま」

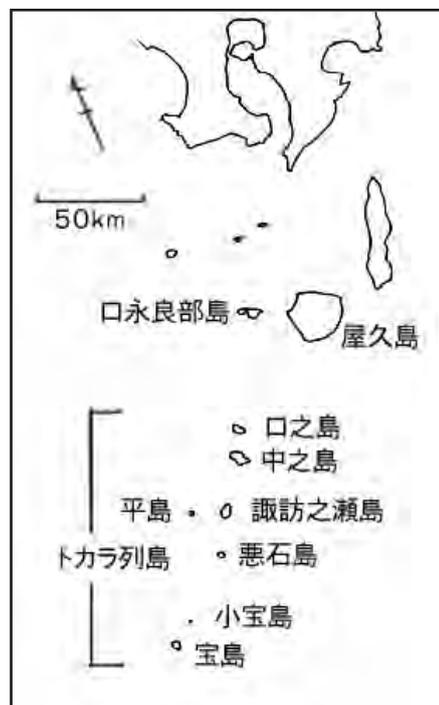


図1 トカラ列島の位置

てくれたが、小さいコウモリを昔見たことがあるという人がただけである。

諏訪之瀬島は、トカラ列島では中之島に次いで面積の大きな島だが、中央にある御岳は活火山で、さかんに噴煙を上げており、周囲は立ち入りが禁止されていて植生も乏しい。集落は港の近くにあるだけだ。集落の中には実をつけたガジュマルの木があり、バナナやシュロの畑も少しあるが、オオコウモリのペリットは見あたらない。近くの別の民宿の人が、海岸で大きなコウモリを見たことがあるというので、電話で話してみた。カラスより小さく40cm弱だという。目が大きくてギョロツとしてねずみっぽ顔をしていたというが、何だったのだろう。夜間、集落の周辺を歩いたが、オオコウモリの気配は全くなかった。

植生から考えても、一時的に少数のオオコウモリが滞在することは可能でも、周年生息することは無理と思われた。

### 平島

諏訪之瀬島は1泊だけで、翌12月8日の朝宝島から折り返して上ってくる「としま」に乗って一つ手前の平島(写真4)に戻る。トカラ列島を短期間で効率よく、いくつかの島を回ろうとすると、このように上り便と下り便を複雑に使い分けてジグザグに進む必要がある。

平島は小宝島と並んで今でも接岸の難しい島である。平島の荷揚げ作業をしている島民に「としま」の乗組員が、小宝島では岸壁につないでいたロープが切れたといていた。低気圧の影響がまだあるのか、海はずっと荒れ気味で、接岸中の船も大きく上下に揺れている。

平島は2泊の滞在だ。初日は午後雨が降ったが、1時間半くらいで上がったので、集落の中から周辺の林や水源地の方までかなり歩き回った。10年以上前にはコウモリが集落のガジュマルの木に来た話や、小さい頃アコウの木にぶら下がっているのを見たことがあるという人もいた。小コウモリだろうが、港の倉庫の壁のひびにコウモリのねぐらがあった話、集落のはずれの墓地にある防空壕にも昔コウモリがいた話なども聞いた。夜も雨が降ったが小降りになったタイミングを見て集落周辺を歩く。オオコウモリの気配はなし。

2日目の9日に集落の少し北、水源地道路と呼ばれている道の途中で1ヶ所、熟したオオイタビの実があつて、ペリットを見つける(28ページ写真7)。昨夜の雨で水を吸ってだいぶ膨らんでいたが、前日か前々日のペリットと思われる。この日も午後から雨が降る。雨の合間に夜も外を歩きまわり、昼間ペリットを見つけたところにも行っ

てみたがオオコウモリの姿は見られない。

平島は集落周辺にはアコウ、ガジュマルも多く、広葉樹林も多く残っている。また、東海岸の斜面にも所々広葉樹林が残っているのので、少数であれば周年生息も可能かなという印象を持った。

平島で滞在した民宿大峰荘では、毎回島の食材をふんだんに使った料理が出た。2日目の夕食は一人一匹ずつ伊勢エビがでた(写真5)。まずは背中部分をお刺身に。われわれが食堂に座ってから頭を落としたので、食卓に出されてからも脚は逃げだそうとしているかのように動いていた。甘みがあつておいしい。お刺身を食べ終わったあとの背の部分



写真3 諏訪之瀬島



写真4 平島

を焼いて、殻にまだまだたっぷりついている香ばしい身を食べる。もちろん他にもたくさん海の幸が並ぶ。そして翌日の朝食には、頭の部分がみそ汁になって出てくる。脚の一本一本まで身をほじくり出して食べた。トカラの島々には食堂がないので、泊まった宿で3食とも食べることになり、宿の食事は普通以上に大きな意味を持っている。本来は平島は3泊の予定だったのだが、悪天候で「としま」が5日に出港できなかったのがここにしわ寄せされて、2泊になってしまったのが残念だ。もちろんペリットが見つかったのにオオコウモリが見られなくて残念という意味も含めて。



写真5 夕食には一人1匹のイセエビが!

### 中之島

12月10日には再び上りの「としま」に乗って、今度は中之島に行く。中之島ではスイートスプリングという新しいみかんが旬のようだ。われわれと入れ違いに「としま」に乗る人たちが、おみやげだろうか箱をいくつもかかえて乗っていった。われわれも宿で出してもらったが、果肉がとろけるようにやわらかい。

ようやく晴れてきた。中之島は過去2回行って、島の様子はつかめているので、昼間は、東区、西区周辺と御岳へ登る道の途中あたりまで、ペリットを探して歩く。ペリットは見つからなかったが、夜は里という集落でオオコウモリが1頭ずつ3回飛んだ。中之島では過去にもエラブオオコウモリを見ているが、個体数が少ないようで、観察しにくいし、近くには来ないので撮影には向かない。今夜もやはり見づらくて、近くでは観察できなかった。

中之島には東区と西区にそれぞれ共同温泉があるのが楽しみだ。泊まった宿が東区の更に東にあったので、今回は東温泉にしか行けなかったが、それぞれ違う種類のお風呂が楽しめる。また、中之島の中央部は、台地となっていて集落があり、トカラ馬の牧場や歴史民俗資料館などがある。トカラウマはトカラ列島で農耕用に使われていた在来の馬で、小柄でビロードのような毛並みをしている。子馬を含めて8頭がいた。

翌11日は、集落からこの高尾台地に行く道を300mほど進んだところにある資材置き場近辺で、オオイタビのペリットを見つけた。夕方この場所で待っていると、19時頃からオオコウモリが飛び始め、同時に2頭（少し離れた場所にもう1頭いる気配があったのでおそらく3頭）観察した。なかなか近くでは観察できないが、しばらく待っていたら、比較の見やすい枝にとまってオオイタビを食べ始めた。この夜は西区でも2回1頭ずつ飛翔しているのを観察した。

3日目の12日の夜は、この資材置き場だけで観察した。同時に観察できたのは最大3頭だった。

あくまでも印象に過ぎないし、根拠もない推定だが、前2回の滞在と考え合わせて、中之島のオオコウモリの生息数は最大でも50頭を越えることはないだろうと思われる。

### 悪石島

12月13日は、朝7時に「としま」が中之島の栈橋に接岸する。今回は下り便なので朝が早い。このあいだまで滞在した平島、諏訪之瀬島を経て10時50分には悪石島(写真6)に降りた。あいにく、また雨が降り始めた。泊まった民宿「浜辺」は、かなりのお歳のおじいさんとおばあさんがやっていて、港に迎えにきてくれたのは、トカ



写真6 悪石島の港



写真7 オオコウモリのオオイタビの実のペリット (平島にて)

ラ列島の建設工事を一手に引き受けている吉留建設の常連のお客さんだった。悪石島の集落は港のそば(浜集落)と上集落に分かれている。泊まったのは浜集落で、むかし民宿の前のガジュマルがもっと茂っていた頃には、ここにもオオコウモリがやって来たという。雨の合間に海岸沿いを歩いていくと、温泉と砂蒸し温泉があった。砂蒸し温泉の入口はノヤギが入らないようにひもで縛ってあった。周囲には硫黄を含んだ蒸気が噴き出しているところもある。温泉近くにシュロやガジュマルがよく茂ったなかなかいい森があり、あまり利用はされていないようだが遊歩道もある。メジロやアオジ、ヒヨドリその他カラフトムシクイの姿も見た。

この日は、オオコウモリのペリットはまったく見つからなかった。夕方からは大雨となり、風も強くなってきたので、車で温泉に行ってこの夜は観察はせずに終了。

翌14日は曇りで風が強く、海は時化している。悪石島は、トカラの島では珍しく、湾の中に港があるので、比較的波の穏やかなことが多いようだが、それでもかなりの波があつて、上りの「としま」が大きく揺れている。揺れるせいか年末で荷物が多いせいか、荷物の積み込みはかなり時間がかかって、なかなか出航しない。上の集落から船の様子を見に来た人がいたくらいで、各島で遅れが積み重なって鹿児島着は20時30分の予定が23時頃になると放送していた。

この日は一日中風が強く、時々晴れ間もあるが小雨も降る。昨日カラフトムシクイを見かけた海岸沿いの森に行ってみたが、あいにくもういないようだ。遊歩道では、蔓植物や枯れた枝、シュロの葉の先端にリュウキュウアサギマダラがたくさん止まっていた。上の集落へも歩いて行って、教員住宅と商店の間の道路上でオオイタビを食べたペリットを

見つけた。また集落の南のはずれの迫寺(さこじ)というお寺の境内にギョボクがたくさん実をつけていて、この実を食べたペリットも見つかった(写真8,9)。この迫寺は、うっそうと繁ったいい森になっている。集落の人も、コウモリはこの2ヶ所で声を聞くことがあるといていた。夜、教員住宅と商店の間の道路上で3回飛来するオオコウモリを見かけたが、同一の1頭だと思われる。宿のある浜集落から上の集落までは、歩いて30分ほどかかるのが少々面倒だ。

15日の昼間、そのオオイタビのある教員住宅と商店の間の道路に行つて、新しいペリットを確認する。迫寺の裏の林を歩いていくと集落の大きなガジュマルの木のとこにでるのだが、そのガジュマルの前の家の人が、昔はよくオオコウモリを見たという。水を置いておくと飛び込んで水浴びして出て行ったともいっていた。この夜も教員住宅前の通りのオオイタビに1頭が5分間ほど滞在していった。迫寺でも1頭飛んでいくのが観察できた。

16日の天気は曇り。悪石島最高峰の御山に登る。標高はわずかに584mだが、本土の山なら麓もそれなりの標高からスタートするのだが、島の山というのは、海拔ほとんど0mから登らなくてはならないので、けっこう厳しい。2時間かけて登った頂上は、360度の展望がすばらしく、多少ガスがかかっているものの、噴煙を上げるお隣の諏訪之瀬島や、ちょうど諏訪之瀬島を発つてこちらへむかってくる「としま」も見える。今年の皆既日食は、この悪石島が皆既日食継続時間



写真8 ギョボクの実とペリット (悪石島にて)

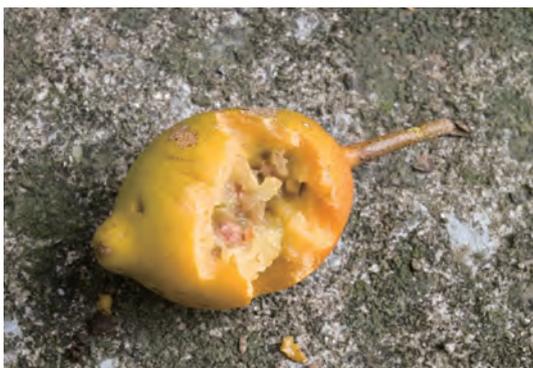


写真9 ギョボクの実の食痕 (悪石島にて)

が6分25秒と最長となるはずで、晴れていればすばらしいショーとなるだろう。

降りる途中の斜面で渡りをする蝶アサギマダラを見る。おとといのリュウキュウアサギマダラよりも一回り大きく、網目模様もリュウキュウアサギマダラよりも大きい。羽がぼろぼろなのは、長距離を渡ってきたのだろう。宿に着くと12時過ぎで、ちょうどお昼ご飯の用意ができていた。お昼はウナギ丼と和風スパゲティとなすのみそ焼きというユニークな組み合わせだった。この宿は、自家製の豆腐がとてもおいしかった。

この日は夕ご飯がだいぶ遅れたのだが、幸運にも上集落へ帰る車に乗せてもらうことができ、いつものオオイタビに5分で着いた。乗せてくれた上集落の人も、ずっと昔は結構オオコウモリを見たそうで、今回行く機会がなかったが金山という別の神社にいるかもしれないといっていた。教員住宅前のオオイタビのポイントでは心配がないのでずっと待ち続け、1時間くらいたって、そろそろ迫寺の方に移動してみようかと思いながら上を照らしてみたら、いつの間にか1頭オオコウモリが静かに休んでいた。数が少ないせいもあるのだろうが、同じクビワコウモリでも沖縄の亜種オリオオコウモリと違って、こちらの亜種エラブオオコウモリはほんとうに静かで心配がない。10分くらいそのまま姿勢を変えずにじっとしていた後、にわかにオオイタビを食べ始めた(写真10)。この日、目の前の教員住宅に帰る悪石島中学校の先生に、学校の生徒にオオコウモリの写真を見せたいといわれ、メールで送る約束をする。

悪石島は、集落周辺以外にも島の周囲の所々に、わずかだが広葉樹林がある。印象としては、周年生息も何とか可能だとは思いますが、オオコウモリの生息数は数頭、多くても10頭くらいだろうか。

### 今後の課題

今回訪れた4つの島は諏訪之瀬島を中心にして島間の距離が15 kmから20 km程度である。平島も悪石島もそれぞれの島だけではとても長年繁殖を継続していけるだけの個体数が生息しているとは思えない。しかし、島間をオオコウモリが行き来していると仮定すれば、種の存続が可能な最低限の個体数がなんとか確保できていたと考えられる。これについては、クビワオオコウモリの移動可能距離を推測する手がかりともなるだろう。いずれにしても、トカラ列島のエラブオオコウモリの生息数は合計しても100頭には満たないのではないかと思われ、早急に詳細な調査を行う必要があるだろう。

### 引用文献

- 船越公威. 1990. トカラ列島のコウモリ相. 自然愛護, 16: 3-6.  
船越公威・國崎敏広. 2003. 口永良部島におけるエラブオオコウモリの生息個体数と個体群構成. エラブオオコウモリ天然記念物緊急調査報告書, 37-43.  
國崎敏広. 1999. 平成11年度鹿児島県育英財団研究経過報告書.  
國崎敏広. 2002. トカラ列島に分布するオオコウモリ(絶滅危惧種1類)の生態学的研究. 平成14年度鹿児島県育英財団研究経過報告書.

(おおさわ・けいこ, おおさわ・ゆうし 埼玉県川越市)



写真10 オオイタビの実を食べる  
エラブオオコウモリ(悪石島にて)

# 第14回コウモリの会総会報告

コウモリの会事務局

日時 2008年8月3日(日) 場所 沖縄市沖縄こどもの国

## 1・あいさつ

## 2・事業報告(2007年7月1日～2008年6月30日)

### 2-1 コウモリフェスティバル2007in 乗鞍高原(2007年7月21日～22日)およびコウモリ展(7月21日～8月31日)の開催

事務局より盛況に終わった旨の報告。コウモリ展には推計500名が参加した。

### 2-2 韓国のクアアカコウモリの保護活動協力について

事務局より報告 2007年2月に韓国の忠州環境運動連合代表の朴一善氏より要請のあった韓国忠州でのクアアカコウモリ生息地「セコジ」の保護活動について、2007年8月27日～9月1日に忠州で行われた「クアアカコウモリフェスティバル」に応援の依頼を受け、コウモリの会事務局の三笠、水野が会を代表して参加してきた。フェスティバルでは6日間で3千人が訪れ、盛況で、忠州市民に国の天然記念物でもあるクアアカコウモリの存在とその保護についてPRできた。

また、2007年12月21日～25日は、朴氏の依頼により、コウモリの会有志でセコジに生息するクアアカコウモリの調査を行い、道路建設による影響とその保全措置についての状況を確認することができた。詳細は会報「コウモリ通信」21号26-37を参照。

### 2-3 NHK「しぜんとあそぼ コウモリ」の制作に協力

大沢氏より報告 アブラコウモリの生態を紹介した「しぜんとあそぼ こうもり」(2007年9月NHK教育テレビで放映)の番組制作にコウモリの会評議員の大沢夕志・啓子氏、中川雄三氏、安藤陽子氏、山本輝正会長、事務局の水野昌彦、三笠暁子が、番組づくり、内容チェックなどに協力した。ディスタープに注意し、特殊なカメラをつかって撮影されたアブラコウモリの子育ての様子が中心に構成され、貴重な映像を撮影することができた。今後も定期的な再放映が予定されている。

### 2-4 NHK「ダーウィンが来た! 黄金コウモリ大発見」の内容について意見および質問状を提出

事務局より報告 2007年5月に放映された「ダーウィンが来た!」第55回「黄金コウモリ大発見」の内容について、ディスタープに対する配慮に欠けている点や、事実と異なると考えられる点などについての意見と質問を2007年10月上旬にNHKに送ったところ、10月末にNHKより回答が届いた。回答によると、この番組は韓国の公共放送KBSが作成し、撮影は韓国政府環境部の担当者により行い、ライトはコウモリの行動に影響を与えない程度にしかあてていないこと、昼間に飛んだことを大発見かのように紹介している件(調査の際に驚かせば昼間でも飛ぶ事があり、それは日常的に飛んでいることとは異なるとコウモリの会で指摘)については、韓国政府環境部による2005年に行われた生態調査に参加した韓国の研究者から直接、確認しているとの返答であった。人気のある自然番組だけに、視聴者への影響を考え、事実内容の事前確認(日本で放映する場合は、表現などに翻訳の誤りがある場合も考えられるため、日本の研究者にも確認してほしい)と、野生動物を撮影することへのディスタープへの配慮については、もう少し細やかな対応をお願いしたいと思われた。

### 2-5 多摩六都科学展「ぼくのとなりのコウモリ君」開催に協力

大沢氏より報告 2008年3月22日(土)～5月11日(日)、東京都西東京市にある多摩六都科学館にて春の特別展「ぼくのとなりのコウモリくん」が行われた。会場にはコウモリの顔のおもしろさや飛び方のひみつ、音で物の位置をさぐる暗闇体験コーナーなどさまざまな工夫がなされ、親子連れでにぎわった。評議員の大沢夕志、啓子両氏によるコウモリのおはなしとアブラコウモリ観察会には定員50名に対して応募が200名あった。観察会では館庭を飛び交うアブラコウモリをバットディテクターを使って観察した。科学館ではスタッフを常駐し、展示に

ついてお客さんに丁寧な解説を行い、好評であった。期間中の入館数は2万人を越えた。

### 2-6 コウモリ通信投稿フォーマットについて

事務局より報告 コウモリ通信への原稿の投稿について、これまで形式は自由としてきたが、ある程度の決まりを設けた方が投稿して下さる方がより原稿を書きやすいのではないか、また、原稿受領後の編集作業上のチェックもしやすくなるのではないか、ということが昨年の総会で話し合われ、今回、投稿の基本フォーマットを作り、会のホームページに掲載した(2008年5月20日)。

### 2-7 コウモリ通信第21号発行

事務局より報告 2008年6月に第21号の会報を発行した。

### 3・会計報告 承認されました。(次ページ)

### 4・予算案 承認されました。(次ページ)

### 5・事業計画

5-1 来年のコウモリフェスティバルについて事務局より 現段階でまだ来年のコウモリフェスティバルの開催地は決まっていないので、いくつか打診してみたいと思う。もし、どこか候補があったら、事務局に連絡をほしい。(その後、2009年は岩手県網張温泉で行うことに決定)

### 6・その他、提案など

金城氏 沖縄では戦時中にガマ(自然洞窟)を防空壕として使用した歴史があり、現在、平和教育の一環としてガマに入るツアーなどが行われている。中にはコウモリが生息している場合があり、しかもそのようなツアーは夏に多く行われていることから、コウモリの出産、子育て時期と合致しており、コウモリの出産洞が人の入洞でディスタープを受けるおそれがある。ツアーを行っている方々に、コウモリ生息への配慮をお願いするような文書をコウモリの会で送れないだろうか。これまで、個人でいろいろな団体、機関を回ったが、どこもとりにあってくれなかった。今後も、修学旅行生なども含め、平和教育への需要とそれに対応する供給は高まっているが、それらを集約する機関がない。県にそれをお願いしたい。

船越氏 県の指導は非常に重要なので、県にまず要望書を提出してみようと思う。

大沢氏 どのようにしてほしいかの具体案が提示できるかと思う。

鈴木氏 ツアーの内容に、コウモリへの配慮というのも盛り込んでもらうようにしてほしい。

田村氏 洞窟関係でネットワークがあるので、相談してみたいと思う。できればコウモリの会でガマでコウモリを見つけた場合の対処法を作って、ガイド側に配布できるかと思う。

県への要望書は金城氏が、冊子の案は田村氏がまとめて事務局に提出することになりました。

### 7・役員改選

昨年度と同様のメンバーで了承されました。

会長 山本輝正 副会長 松村澄子

評議員(五十音順) 安藤陽子 大沢夕志 大沢啓子 齊藤 理 佐野明 中川雄三 原田正史 船越公威 箕輪一博 向山 満 吉倉智子 オブザーバー(HP担当) 丸山健一郎

事務局長 水野昌彦

編集委員長 三笠暁子

会計監査 林 聡彦

顧問 吉行瑞子

### 8・閉会

\* 2009年8月30日に行われました第15回の総会報告は次号で紹介する予定です。

コウモリの会 2007年度 一般会計 会計報告 (2007年7月1日～2008年6月30日)

収入		予算 (2007年度)
会費	173,000	300,000
グッズ (LaB、カンパッジ、コウモリフェス売店、など) 売上	139,911	
バックナンバー売上	12,500	70,000
多摩六都館展示協力謝礼金	26,370	
小計	351,781	370,000
前年度繰越金	463,808	463,808
合計	815,589	833,808

支出		
コウモリ通信21号印刷費 (40p、700部)	176,820	120,000
コウモリフェスティバル2007in乗鞍高原開催費 *特別会計へ補助	155,827	130,000
通信費 (通信21号発送費、郵送費、FAX、電話代)	70,075	75,000
グッズ、冊子制作費 (カンパッジ制作費)	0	25,000
雑費 (文具、振込手数料、コピー代など)	30,403	20,000
小計	433,125	370,000
次年度繰越金	382,464	463,808
合計	815,589	833,808

コウモリの会 2007年度 特別会計資料 (コウモリフェスティバル2007in乗鞍高原) (2007年7月21日、7月22日開催)

収入	
コウモリの会予算 (*一般会計より繰入) より	155,827
懇親会寄付 (懇親会参加者一同より余剰分)	4,242
合計	160,069

支出	
郵送代	29,245
ポスター印刷代 (500部)	49,875
チラシ印刷代 (7000部)	62,685
文具など	18,264
合計	160,069
収支合計	0

コウモリの会 2007年度 特別会計 (コウモリ保護基金) 会計報告 (2007年7月1日～2008年6月30日)

積立金	
積立 (前年度繰越) 金	458,312
寄付収入	106,782
合計	565,094

支出	
大野川小学校児童によるコウモリ研究発表への表彰状作成	10,000
韓国コウモリフェスティバルへ1名派遣 (三笠) 費	35,200
小計	45,200
次年度繰越金	519,894
合計	565,094
収支合計	0

以上のとおり報告します。 2008年8月3日 コウモリの会会長 山本輝正  
 監査の結果適正に処理されていました。 コウモリの会 会計監査 林 聡彦

コウモリの会 2008年度 予算案  
 一般会計

収入	
会費	360,000
バックナンバーなどの売上	15,000
グッズ (カンパッジ、Lab) 売上	55,000
小計	430,000
前年度繰越金	382,464
合計	812,464

支出	
会報印刷費	170,000
コウモリフェスティバル予算 (特別会計へ補助)	130,000
通信費 (郵送費、FAX、電話代)	75,000
グッズ (カンパッジ、Lab) 制作費	25,000
雑費 (文具他)	30,000
小計	430,000
次年度繰越金	382,464
合計	812,464

特別会計

収入	
コウモリフェスティバル予算 (一般会計より繰入)	130,000
コウモリ保護基金前年度繰越金	519,894
合計	649,894
支出	
コウモリフェスティバル支出	130,000
コウモリ保護基金 * 1	519,894
合計	649,894

\* 1 コウモリ保護基金は必要に応じ、その利用規程に従い、予算内で支出することがあります  
 以上のとおり報告します。 2008年8月3日 コウモリの会会長 山本輝正

■**コウモリフェスティバル 2009in 岩手網張温泉が行われました!**

2009年8月29-30日に岩手県雫石町網張温泉にて行われました15回目のコウモリフェスティバルは、無事終了いたしました。ご参加いただいた皆様、大変お疲れさまでした。予約参加者にあわせ、当日の参加者を含めて約100人ほどの方が参加され、楽しいひとときを過ごすことができました。地元でご尽力いただいた向山満氏、NPO法人「コウモリの保護を考える会」事務局の作山宗樹氏ならびに会員の皆さん、講演をいただいた遠藤公男氏、中島宏章氏、山本輝正氏、環境省の多田由喜男氏、網張ビジターセンターの皆さん、休暇村岩手網張温泉の皆さん、そして遠いところからかけつけてくださったコウモリの会のスタッフの皆さん、本当にどうもありがとうございました。ハープトラップによる捕獲調査と合わせた観察会では、たくさんの種類のコウモリを見ることができ、参加した子どもたちの好奇心いっぱいの表情が印象的でした。7月1日～8月31日まで網張ビジターセンターで行われました「空飛び哺乳類・コウモリのひみつ展」の芳名録には179名分のお名前と「コウモリはすぞい!」など子ども達の感想がたくさん書かれていました。詳しい報告は次号のコウモリ通信に掲載する予定です。



今年も野口郊美さんがすてきなコウモリポスターを作ってくださいました

■**コウモリの会ホームページが移転しました**

2009年10月13日より、コウモリの会のウェブサイトがhttp://www.bscj.net/に移転しました。これまで長い間、奈良教育大学のサイトをお借りしておりました。どうもありがとうございました。ホームページは引き続き、丸山健一郎さんが管理、運営してくださいます。

■**埼玉県立川の博物館コウモリ企画展に制作協力しました**

埼玉県寄居町の川の博物館で、2009年4月28日～7月31日の期間、常設展示室のスロープ部分の展示コーナーにてコウモリの会が作成した「コウモリのひみつ」パネルなどが中心となったコウモリの展示が行われました。この展示は2011年春の企画展示室での展示に向けたプレ展示という位置づけとのことです。2年後の企画展も楽しみます。

■**アクアマリンふくしまにて特別展「南の島のオオコウモリ」が行われました**

福島県いわき市にある水族館、アクアマリンふくしまで企画展示「南の島のオオコウモリ」が2009年5月25日～11月4日まで開催されました。日本で初めてのオオコウモリだけの企画展です。なぜ福島県でオオコウモリかというと、ここは黒潮をテーマとした水族館なので「琉球弧～黒潮の島々をめぐる旅～」という連続の企画展示をやっているため、今回はその7回目にあたります。コウモリの会は後援となり、評議員の大沢夕志氏によるクビワオオコウモリの貴重な生態写真、生息環境写真や、翼を広げると、1m近くになるクビワオオコウモリの剥製、音声(コウモリの鳴き声)、翼模型、骨格標本などが展示されました。



企画展ポスター(アクアマリンふくしまのホームページより)

■**各テレビ局に「コウモリに関する放映時におけるお願い事項について」の文書を送りました**

コウモリに関する放送における注意点と、コウモリの会組織の紹介をまと

めた文書を、2009年3月、各主要放送局宛に送りました。コウモリについての誤った内容の紹介や、捕獲には許可が必要なことを知らずに捕獲した映像を流すなど、事例を紹介しながら、項目ごとにまとめました。会のホームページ(www.bscj.net/)でも公開していますのでご覧ください。

■**群馬県みなかみ町赤谷の森にて「コウモリ類保全のための音声ライブラリーづくり」が進められています**

2009年1月、セブンイレブンみどりの基金に「コウモリ類保全のための音声ライブラリーの作成」の活動助成を申請し、申請が受理され、4月より群馬県みなかみ町の赤谷でコウモリの会メンバーによるコウモリの音声ライブラリーづくりが行われています。活動報告については今後、会報にて紹介していく予定です。

■**バンドナンバーの情報提供を引き続きお願いいたします**

コウモリの標識バンドについて、これまで、多くの方から情報をご提供いただき、事務局にナンバーの問い合わせがあった場合の対応に役立てております。しかし問い合わせの中には、事務局で把握していない所有者不明のバンドナンバーもあり、せつかくの再捕獲記録が活かされずにおります。会員の皆様およびお知り合いの方で、コウモリにバンドをされている方がいらっしゃいましたら、データ活用のためにも事務局にお知らせいただけますようお願いいたします。

■**洞穴データベースへの情報提供を引き続きお願いいたします**

「全国コウモリ生息洞穴データベース」は、コウモリ保護のため、行政などに働きかける際の根拠となる資料として、今後も継続して充実を図っていく予定です。今後も、データの提供をよろしくお願いいたします。とりまとめ担当・連絡先: 佐野明氏

\*コウモリの会のホームページのブリーフケースに様式ファイルがありますので、これを使用していただけると大変助かります。

■**コウモリ保護基金、募金をお願いします!**

コウモリフェスタを会独自でも行えるための基金や、コウモリに関する問題がおこった場合の対応にかかる資金を会員の方々の募金で作るコウモリ保護基金を設立しました。一口いくらでもかまいませんので、お振込をお願いいたします(郵便振替口座 00270-4-12189 口座名: コウモリの会)。なお、会費と同時に振込される方は、振替用紙の通信欄に「会費〇年分、コウモリ基金〇円」と明記してくださいようをお願いいたします。

■**JAPAN-BATS 参加募集**

コウモリの会メーリングリスト JAPAN-BATS は、会員の方ならどなたでも参加できます。会員の皆さんの意見等を聞く体制を持ちながら会を進めたいと思っています。ぜひ多くの会員に JAPAN-BATS へご加入していただくようお願いいたします。参加方法はメーリングリストの管理者丸山健一郎さん kmaljp@gmail.com へ JAPAN-BATS 参加希望という内容のメールをお送りください(その際、住所、氏名、連絡先もお知らせください)。丸山さんの方で登録をしてください。また、メールアドレスのアドレス変更も同様にご連絡をお願いします。

■**コウモリ通信への投稿をお願いします!**

コウモリの会ではコウモリに関する情報を随時受け付けておりますので、お気軽に事務局にお寄せ下さい。また、原稿を下された方にはささやかながら会費1年分を無料にさせていただきます。また、新たにお原稿の投稿用フォーマットを作成しましたので、会のホームページからダウンロードしてお使いください。

■**入会案内**

ハガキ・FAX・Email (mizunobat@yahoo.co.jp) にて事務局までご連絡ください。入会の案内を郵送いたします。\*年会費は1000円です。振込先は郵便振替口座 00270-4-12189 口座名: コウモリの会

**コウモリ通信** Vol.17 No.1 2009. 12

(通巻第22号)

- シンボルマーク 村上康成
- 編集 山本輝正・三笠暁子・水野昌彦
- 印刷 (株) アイワード

発行 **コウモリの会**

(編集後記) 会報の発行が大幅に遅れてしまい、大変申し訳ありませんでした。仕事が急激に忙しくなったこと、赤谷での音声ライブラリー作りの調査と書類作成に多くの時間を費やしました。でも、音声によるコウモリのモニタリングが実現できれば、コウモリの生態調査は大きく前進すると思われ、メンバーとともにがんばって進めています。(三)